望んだ異世界でほんわか旅

火だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
望んだ異世界でほんわか旅

【Ｎコード】
Ｎ８０７２Ｖ

【作者名】
火だるま

【あらすじ】
異世界に望んで行った男――それは俺、橋武轟（はしぶごう）。
理由？　そんなもん色々あるが……可愛くロリな女の子に会いたいからに決まってるじゃないか。
だが、美女に殺されかけるわ、異世界から地球に戻されるわ……とにかく俺の異世界召喚は普通とは違ったんだ。
よし、まずはロリをパーティーに入れよう。
ご都合主義や主人公が強いなどあります。異世界ものが書きたくて

作者が思いつきで始めたものです。

1　異世界？

「避けろっ！」

俺は言われたとおり思いっきりジャンプする。

すると、先程まで俺がいた付近の地面から直径二メートルほどの火柱がつきあがり、俺と対面していたモンスターを焼き尽くした。

「避けろって、お前の攻撃だろ！」

今の魔法はフレイムグラウンドというらしい。

半径一メートルほどを炎が天に向かって伸びる魔法だ。

「偶然だ。私はしっかりタイミングを狙っていた。君こそ、油断してたんじゃないか？」

「こちとら完全に見切ってたさ。魔法の援護なんかいらないぐらいにな」

「そうか……。なら次からは私はバトルに参加しないでおこう。ひっそりと後ろの方で待機していよう」

急にしょぼんとアンテナのような前髪を下げ、悲しそうに肩を落として歩いていく。

「まーてまてまて！」

目の前の美女は、マナと言う。

俺を異世界に呼んだ……ってその前にここがどこか説明しないと

か。
ここは異世界――ディフィトとかいう世界で俺は自分の意思でこの異世界に来たんだ。
って、早くマナを追わないと迷子になるな。
あいつ、後ろのほうで待機してるとか言ってどんどん突き進みやがって……。
まだ異世界に慣れてない俺の身にもなってくれ。

☆

周りに大きな建物などない、それどころか大地が遥か先まで見通せるこの地は日本ではないようである。
一瞬自分がゲームの世界に入り込んだのかという錯覚を感じた。
俺のファンタジーのイメージをそのまま具現化させたような場所。
俺は状況が飲み込めなかったが、一つだけ分かることがある。
俺の横に女が倒れているということだ。

「おい、アンタ大丈夫か？」

俺は自分がなぜこんなところにいるのか、それはひとまず置いておき、横で倒れている女の肩を掴んで揺する。
揺さぶられたことで顔を上げた女は……綺麗だった。
髪は長く、水色をしている。前髪がピンとアンテナのように伸び、先が少し丸々ようになっているのが可愛らしい。
特に縛っているわけではないが、顔に掛からないように前髪を横に流している姿が似合っている。
顔は幻想的すぎるほどに綺麗でしかし可愛さも共存している。

三次元に可愛い女子がいないことから（いたとしても見向きもされない）二次元に逃避行していた俺をふたたび三次元に引っ張りあげるかのようだ。
汗が滴る顔は艶かしく、変な気持ちになり生唾を飲んでしまう。
俺の心配に女はやりとげたようにニコリと笑い、それが俺の心をどくんと脈打たせる。
まじで、なんだ。可愛い？　美人？
どちらの表現もあてはまるこいつは何者なんだ？

「早くお前に渡さねば……」

「は？」

女は何やら物騒な剣を俺の体に向ける。

「待て待て待てって！　何が起こってんだよ……」

鈍い動きをした女の剣を持っている方の腕を掴む。
そうすると、あっさり体から力は抜けあきらめたように剣を手からこぼし、俺の方に持たれかかる。

「おまっ、すっげぇ熱じゃん」

あまりにも苦しそうにしていたので額に手をやると、俺の手は熱したフライパンを触ったような、火傷に近いものを感じて熱くなる。
女は俺の胸に手を置き、女の足元に魔方陣が浮かび上がり、

「……フレイムアロー」

ずんっと、俺の体を熱量を持った何かが貫通する。

女の言葉を日本語訳すると、炎の矢。
……魔法か？　似たような名前をゲームで聞いたことがある。
俺は体に力を入れることが出来ず女に突き飛ばされるように、後ろに倒れる。
痛い、熱い。
体から生気が失われていくのが分かる。
目の前に死が鮮明に、形として見える。
――死。
初めて訪れる死だが、思っていたよりも恐怖はこみ上げては来なかった。
ただ、クリアしてないゲームがいっぱいあるなぁと変に落ち着いた感想が浮かぶだけだった。
ゲームの最後が分からないという恐怖なら感じている。

「これで、やっと始められる……」

女は俺に馬乗りになり、俺の傷に小さく壊れそうな手を触れる。
両わき腹を挟む肌むき出しの太ももがいい感触で、死に掛けているにもかかわらず鼻の下が伸びてしまった。
というより、彼女の格好はさっきは意識していなかったがかなりエロティックだ。
胸しか覆われていない、しかもその胸のラインが分かるほど張り付いたへそがでている衣服。
胸はでかい、かなりでかい。顔を埋めたい。
スカートは足をあげたらすぐにパンツが拝めてしまえそうだ。いや、少し歩いただけでも見るかもしれない。
俺は女の手から感じられる人を想う優しさを感じ、さっき感じた恐怖――もともと大したものではないがそれさえも完全に消えた。
この後こいつに何をされるか分からないが、受け入れようと思う。

「今から、魔力授与を始める。体に痛みが走るかもしれんが……すまない。我慢してくれ」

既に痛みは俺の体で暴れるように走りまくってるぞ。

声に出したくても肺がやられているのか口からは血しか出てこない。

女の手が光を放つ。

今度のは攻撃、ではないようだ。

優しさを光にしたようなものを感じる。

想像通り、光は俺の体の内部に入ってきて俺の傷を癒していく。

傷の癒しは遅い。それでも少しずつ塞がっていく。

なんなんだ、これは。

まるで、魔法のようじゃないか。

先程魔法か？　と考えていたがどうやら当たりらしい。

ここに来て、ようやく俺は自分の状況を考えるようになった。

少し、遅いのかもしれないが慌てていたのだから仕方がないだろう。

下校途中にいきなり黒い渦のようなものが現れた。

俺は異世界にでもいけるのかと、半ば自暴自棄に突っ込みそして今に至る。

異世界、か。俺がこちらの世界に来る前の考えが正しいのなら予想通りだな。

ここは異世界でその確固たる証拠がある。

先程俺を殺しかけた魔法。今傷を癒している魔法。

何よりの証拠だと言える。

俺は自分の上に乗っている美女を見て、確信する。

こんな美女がいるのは異世界しかありえない、と。

現世――地球では芸能人でもこのレベルのを俺は見たことがない。

少しずつでも、傷は治っている。

すでに俺の胸の傷がほとんど塞がっている。

「いいか、ここからが本番だ」

女は気を引き締めるように体を動かす。

おおう、おしりとかおしりとかすげぇ当たってる。

前に少しずつずれてきて、両の太股で俺の両腕を押さえつける。

……な、なにが始まるんだ。

1　異世界？（後書き）

楽しんでもらえるように努力します

2　解放

少し動かせばスカートの中が見放題。
顔を上げれば美女のどこにでも押し付け放題。
そんな状況下に置かれた健全な男子高校生である俺はいけない妄想しかできない。
俺は、俺は、異世界に来た瞬間に大人の階段を登るのか？
怪我をしながらものん気な考えをしていた。
と、そこで俺は自分の傷が完全に塞がろうとしているのが目に入った。
女もそこに視線を注ぎ、なにやら　タイミングを図っているような気がする。
俺の傷が完全に塞がるのを見たと同時に、美女の緊張を含んだ怒声がする。

「いくぞっ！」

美女はさっきまでとは比べ物にならない光を放ち、それが俺の体に入ってくる。
なんだ、これは。
ぞくっと快感ではなく、恐怖が体に侵入してくるようだった。
侵入してきた恐怖は、俺に不安感を残すだけでなくはっきりと体に痛みとして表れる。
さきほどのファイアアローとは比べ物にならない痛みが俺を襲う。
外への痛みではない、内側から熱せられるような痛み。
体の中の異物を吐き出すために俺は体を跳ねるように動かす。
止まっていては、体がなくなってしまいそうだ。

「ぐあっ！！」

「やめろっ！　暴れるな！」
女は力強く太股で両腕を押さえる。
脚は……自由に動くがそれだけじゃ女の拘束から逃れるのは無理だった。
動けない。女は力が強く俺はただ、叫ぶことしか出来ない。
体の中の何かは、俺という体に永住するのか居場所を求めて駆けずり回っているように感じる。
やがて、動くことを止め一時的に痛みはなくなったが今度は何かを作り始めた。
痛い、気持ち悪い。助けてくれ……。

「悪い、我慢してくれ」

美女は苦しそうに呻く俺を見て、すまないと謝り続ける。
よく見ると、美女は最初ほど苦しそうではない。
美女の顔を見て、少しは落ち着いたが所詮少しで、俺の体の中にはまだ異物が残っている。
例えるなら体中をミミズが走っているような、おまけにただ気持ち悪いだけでなく痛みを残しながら。
そんなものに耐えられるわけがなかった。
美女は俺が暴れてこの締め付けから逃げ出さないようにさらに力を込めてくる。
謝るならなんでこんなことすんだこいつは。
少しでも他の事を考えようとするが、体の痛みがそれさえも許してはくれない。
痛みを忘れるために何かをしたくても結局何も出来ない。

それはもしかしたら十秒ほどだったかもしれない。
それでも、俺には一時間ほどに感じた。
ようやく、終わった。
何をしていたのかは分からないがそれでもやりきったような気分になっていて正直複雑だった。
長い、長い、拷問からようやく自由に慣れた人間のような気分で俺は横たわっていた。
隣には同じく美女が。
美女も息を切らして、胸を上下させていた。
なんでこんなことをしたのか。
ここはどこなのか。
聞きたい事は山ほどあったが、それよりも疲労が多い。
だから、ゆっくり目を瞑った。寝たさ。美女の胸を見ながらな。

3　帰還

起きてまぶたをあけるがそれでも暗い――夜だった。
ここはどこだよと思ったのに続いて空の景色が目に入る。
目に飛び込んできた空の景色は……美女を見たときとは違う感動が満ちていた。
星が所狭しと身を寄せ合い、互いに切磋琢磨しながら光を放つ。
そのどれにも負けない、一番の光を放出している月。
星と月、二つが共存する事により、この夜空は完成している。
思わず口を半開きにしたまま、固まってしまった。

「どうした？」

突然、声がかかり思わず身構える。
身構えたのは先程の攻撃のようなものがあったからだ。
声のした方向には美女がいて、より警戒を高める。

「ああ、すまない。先程といっても時間は結構経ってしまったな。まあ、先程は済まないでいいか。先程は済まない」

焚き火を背にこちらに頭を下げる美女。

「先程……？」

思い出した。
さっきこの美女に俺は殺されかけていた。
すると、無意識のうちに攻撃された胸に手を伸ばしていた。
痛みはない。
俺は視線を下にさげて、自分の目で確かめる。

傷はやはりなくなっていた、ただ学校の制服は無残な姿になっていたが。

「さっきは本当に済まなかった。ああするしかないとはいえ、完全に私用で君に痛い思いをさせてしまった」

しょぼんとアンテナのような髪を下げて、申し訳ないと謝る。

俺はいやいやと手を振って、

「全然気にしてねーからな」

結構気にはしていたが、美女に謝れてしまえばこうするしかない。

美女はぱっと明かりをつけたように顔を輝かせて、俺の手を取る。

「ありがとう。そう言ってくれると助かる」

美女の手は、柔らかいか硬いか言われると迷うが硬いに近い。

目を下にさげると腰には剣がついている。

剣を振っていれば手も硬くはなるか。

ぷにぷに柔らかいのではないのが残念だがそれよりも、感謝の笑顔を記憶に焼き残すのが先決だ。

「それよりも、君は大丈夫か？」

きっと怪我の心配をしているんだろう。

頭の心配をしてくれているなら手遅れだと自覚している。

「ああ、大丈夫だそれより、ここはどこなんだ」

周囲を見回すと、焚き火がついていること以外特に情報がない。

目の前の美女がああと手を打つ。

「ここは、ディフィトという世界だ。ああ、君には異世界と言ったほうが正しいか。その前に私はマナ・ベアティ。名前で呼んでくれ。君の名前は？」

ちょうど美女以外の言葉がほしかったのでいいタイミングだ。

「俺は橋武……いや、ゴウ・ハシブだ。俺も名前でいい」

橋武轟（はしぶごう）が俺の本名だが、今の横表記な名前ならと途中で言い換える。

すべてを知っているかのように話す美女――マナ。

異世界と聞いて驚かないのは多少そう把握していたのとゲームなどでの知識があったからだと思う。

ということは俺をここに召喚したのも彼女って事か。

「少し言い訳をさせてくれないか？」

彼女は俺が質問の内容を考えているより先に目を伏せながら言ってくる。

「なにが？」

「最初の件だ」

最初というと、俺が死に掛けたときのことか。

ちょうど質問したいことでもあったので「いいよ」と促す。

「まず、私は病気にかかっていた」

「病気？」

「その病気は魔力がどんどん上がっていってしまう病気なんだ」

「それって何か悪いのか？」

魔力についての説明はなかったが概ね俺のゲームの知識で大丈夫だと考えた。

異世界だからって魔力の言葉の意味が全然違うという可能性はない、はずだ。

そうなると魔力＝魔法攻撃力か魔法を使うのに必要な力と考えればいいはずだ。

ゲームなら最高に嬉しい病気だ。

「人には魔力を持つことのできる量がある程度決まっている。それを超えるということは体に悪いんだ」

「……？」

いまいち深刻さが分からない。

どの程度体に悪いのか俺には理解ができなかったからだ。

俺の表情を見て、女はさらに説明を付け足してくれた。

「魔力を保有できる量を超えてしまえば人間の体は耐え切れず、初めに痛みとして体に表れる。続いて体の進化――悪い意味でだ。そして、最後は死ぬ」

「……お前は大丈夫なのか？」

やっと深刻さが分かりマナの体をなめるよう――心配して凝視する。
胸がでかい以外、特に異常はなさそうだ。
「おかげさまでな」
「おかげさま？」
「増えすぎた魔力はお前にすべて渡したからな」
「それって俺大丈夫なのか？」
単純に病気をあげたと解釈すると俺が凄まじく危険な気がする。
「この病気は他人にうつることはない。さらに病気が進行するのは一日程度で私の方も既に治っている。その代わり君の体には大量の魔力があるかもしれないが……」
「へぇ」
魔力、というものが俺にあるのかどうかを把握する方法は分からないが問題ないなら構わないか。
大体疑問は解消できたので、一つ尋ねる。
「俺の傷は？」
「魔力自体に人の体を活性化させる力がある。つまり魔力を当てるだけでも人の傷を癒すことができる。私が少しでも魔力を多く君に受け渡すために初めに君を攻撃したんだ。本当に済まない」

それなら、まあ、許せるな。
理由がないなら激怒するが、理由がある。
なんていったって美女だしな。
俺は最後に一番気になっている疑問を尋ねる。

「俺はどうすればいいの？」

異世界にきてしまったということは、帰る方法がないのが当たり前だ。
ということは俺はこの世界で住むことになり、そして美少女ハーレムを――。
いや、なんでもない。

「今すぐに送り返そう。時間も時間だ」

あっちの世界に未練もない。
あるのはゲームがクリアできないというさして問題にならないものだけだ。
俺って寂しいなぁ。
……？

「今、なんて言った？」

俺が想像を膨らましている間に何かおかしなことを聞いた気がした。
聞き間違いだと思うが……送り返すとかなんとか。

「だから、今すぐに送り返そう。こちらと君の世界は繋がっているようだから時間も同じように進んでいるはずだ。そうなると既に半日近く進んでいることになるからな」

時間については分からないがそれよりも聞かねばならないことがあった。

「帰れるの？」

正確には帰れちゃうの？　と尋ねたほうがよかったかもしれない。

恐る恐る尋ねると、コクリ。

女は目を閉じて足元に魔方陣を出しながら頷いた。

「本当にすまなかった」

気持ちの篭った謝りに俺がたじろいでいると、俺の目の前に黒い渦が現れて俺を飲み込んだ。

意識が薄れていく。

普通異世界に行ったら帰り方を探しながら、美少女と恋するものじゃないのか？

異世界に行って半日で帰る。

なんだそれ、友達の家か？

4　実験だー！

俺は目を覚ました。
場所は家の近く――異世界に行く前の場所だった。
ここは普段から人気のない場所で明け方に近い今の時間帯はさらに人気がない。
あまりの呆気なさに驚きよりも呆れが先行してしばらく間抜けに突っ立っていた。
しばらくして、こうしちゃいられないと家を目指す。
歩きながらポケットを取り出そうとしたら、制服がボロボロのが目に入る。
制服は替えはないが、事情を説明してジャージで過ごせば何とかなる。
事情の説明なんて近所の犬に襲われたとか言っておけばいいしな。
目的の携帯をポケットから取り出し、時間を確認する。
時間は約午前三時。
日にちが一日変わっていた。
俺が飛ばされたのは四時半くらいだったはずだ。
大体半日が過ぎているな。
ポケットをしまい、家についたので鍵を開け中に入る。
廊下を歩きリビングに入りソファに鞄を投げて、冷蔵庫に向かう。
睡眠はとっていた――気絶を睡眠時間と数えるなら――ので睡魔は襲ってこない。
今日はこのまま学校に行くことになるだろう。
牛乳を取り出しコップに注いで一気に飲んでいく。
飲み物は全く取っていなかったな。
一杯飲んで自分が喉が渇いていることに気づき、さらに飲んでいく。
喉が潤った所で、自分の部屋に行きパソコンを立ち上げる。

親はここにはいない。
父親の転勤で母がついていき、この二階建ての家に一人ぼっちだ。
寂しさはないがつまらない。
家でも学校でもつまらない。
パソコンが立ち上がったのでインターネットを使い、異世界と打ち込む。
様々なものが出たので異世界、小説と打ちかえると今度は目的のサイトが出てきた。
適当に様々な異世界小説を読み――。

「異世界に飛んだらなんかやってるじゃん！　可愛い子と旅したりしてるじゃん！　なんで俺だけ送り返されてんのー！」

あまりにも悲しくて大声で叫んでしまった。
うぅ、なんでだよ。
可愛いロリな女の子に会いたいよぉ。
別にロリに限らずこっちで会えないような美少女、美女とエッチなことしたいよー。
悲しさで打ちひしがれた俺はパソコンの電源を落として、ベットに横になった。
そして、異世界に呼んだ美女を思い出す。
そういえば聞いていないことがあったな。
なぜ、俺を呼んだのか。
魔力の病気がどうたらとか言っていたが、その世界の住民でも問題はないと思う。
どうせなら魔法の一つや二つ覚えておきたかったな。
でも、あの美女はかっこいい美しさを持っていたなと思い出していた。
魔法？
そういえば俺に魔法がわたったとか言っていたよな。

つまり、魔法が使えるのかもしれない。
思った俺は、風呂場に向かう。
魔法を試すためにだ。
外でやるほうがいいのかもしれないが、もしも誰かに見られたら一大事だ。
だったら家の中で魔法を使ったほうが安全だ。
それも被害が少なそうな水の魔法だ。
俺は魔法を発動させる前に魔法の原理を考えていた。
美女はフレイムアローと言っただけで魔法が発動していた。
つまり、俺も言えばできるのかもしれない。

「ウォーターアロー」

何も考えずに呟いてみた。
……でない。
水どころか何も出ない。
もしかしたら呟くだけでは駄目なのかもしれない。
俺は美女が言っていた詠唱とやらをやってみることにする。
目を瞑り、呟く。

「生命の源、水よ。我が目の前に現れ……風呂場を一杯にしてくれ。ウォーター」

途中、何て言おうか思いつかないで変なものになってしまった。
俺は風呂場に水が一杯になっていることを願いながら、そっと瞳を開けると……できていた。
満杯ではないが半分ほどまで水は出来ていて、俺は感動でしばらくぼうとしていた。
何も考えないで風呂に手を伸ばしてしばらく水を堪能して――ようやく脳が理解する。

魔法……使えとるやん。

「やったぁぁぁーー！！」

決して攻撃的ではないが使えているという事実に俺は感激する。
やればできるんだな俺は。
それならと俺は他の魔法も実践してみる。
次に安全なのは氷か？　それとも風か？
そこで、考える。
ゲームには氷属性がないものもある。
だが、四属性――火、水、風、土は大抵の場合ある。
ので、風を試してみることにする。
風は……エア？　ウィンド？　どっちでもいいか。

「ウィンド」

まずは呟いてみるが……やはり発動はしない。

「空気中にある、風よ。風呂場の水を浮かび上がらせよ、ウィンド！」

今度はしっかりと目を開けていた。
そこで気づいたのは途中から魔方陣が浮かび上がっていた。
もちろん成功して風が風呂場の水を五秒程度持ち上げていた。
そして、俺は満足していた。
これがあるなら……現実でも多少は使い物になる。
そんなの決まっている――パンチラさ。
現世にはほとんど、美人なやつはいないがゼロではない。
俺の学校には一人だけ学校のアイドル的な先輩がいる。
常に冷静沈着が似合う綺麗な人だ。

優雅な所作など、大人っぽい人柄で大人気の人だ。
名前は――忘れた。絶対に俺には関係ないので覚える必要はないと思っている。
明日じゃなくて今日。
学校に行ったらこの魔法で中の可愛いパンツを見てやろうではないか。
ぐふふふふ。
風呂場に映っている笑顔があまりにも気持ち悪いのでここらで自重する。
とりあえず、次に使うのはさっき四属性で思い出していた土の魔法だな。
土の魔法はなんだか地味なイメージしかなくて忘れていた。
どうせ言うだけではいけないので詠唱から入ろう。
土って、アース？　ストーン？
かっこよさ的にはストーンだな。

「地を支える岩よ。目の前の風呂場に姿を現せ。ストーン……フォール？」

今度は初めから魔方陣が浮かび上がり、風呂場に小さな円形の魔法が落下してきた。
今まで一番殺傷力がある魔法だ。
今まで土をなめていたがこれからはもっと敬意をはらおう。
心に決めてから俺は風呂場を後にする。
火の魔法も練習はしたかったが、あまりに危険なのでやめておく。
意外と時間が経っていたのも理由の一つだしな。
そういや、岩って地を支えてるの？　気分で言ったからよくわかんねーけど岩では支えてないんじゃないか？

5　パンチラ＝男の夢

朝、予定通りに学校に行く。
俺の格好はぼろぼろの制服を着替え、ジャージ姿だ。
部活があるわけでもない俺がこんな姿だと目立つ。
おかげで学校に登校してくるまで他生徒の好奇の視線がずぐずぐ刺さり、若干の恥ずかしさを感じていた。
そんな調子で歩いていた俺の目の前に校舎が現れる。
校門もみえ、俺はそこに人だかりが出来ているのに気づき、目を細める。
校門には腕に腕章をつけた人がいて、登校していた生徒は鞄を見せていた。
風紀委員のようだ。
近くに歩くと、俺の予想通り。
腕には風紀と刺繍された凝った腕章をつけていた。
風紀委員が荷物検査を行っているなんて俺の学校だけではないのか？
この場合風紀委員会がやる気があるのか、学校側がやれと命令しているのか、いくらか疑問があるがどちらにしろ関係のない俺にはどうでもいいか。
などど思考に耽りながら検査の列に並んでいると、多少咎めるような声がする。
「次のお前、早くしろ」
列に並んでいた俺はさっさと鞄を目の前の女生徒に渡す。
念入りに見ているが、生憎俺は学校に必要なものは持ってこない主義だ。
ないのは分かっているのだから見なくてもいい気がする、時間の

無駄だ。
俺は若干苛立ちを感じたので、片足で地面を叩いていた。
事件を起こしていないのに疑われる人間の気持ちが分かるな。
俺は校門を抜けてから、校舎に入らず近くの木の近くに隠れ先程の風紀委員の女生徒を見る。
中々可愛い。よく見るとこの学校にはそれなりのはいるのかもしれない。
ただ、一度異世界で美女であるマナを見ている俺にはどれも悲しく映ってしまうけど。
周りを見て近くには誰もいないことを確認する。
なぜ、俺が校舎に向かわずにこんな場所にひっそりといるか。
理由は簡単で、今朝試していた実験を敢行するためだ。
俺はゆっくりと息を吸い精神を落ち着かせる。
もしもこれが成功したらノーベル賞ものだと思う。
人類いや男の夢。
誰しも一度はスカートを浮かす風よ吹いてくれとか思ったはずだ。
俺は今、それを発動させる力を持っている。
後は踏み出す勇気だけ。
ごくりと、一瞬天使がやめろよと脳内に現れる。
次の瞬間には悪魔が目潰しして倒していたが。

「風よ、我が欲望のために風を巻き起こし、中の幻想郷を見せろ、ウィンド！」

俺はスカートの中の色を想像しながら詠唱する。
風呂場を後にした俺は簡単な魔法を何度も練習して多少は使えるようになっていたが、その過程で分かったことがあった。
同じ魔法でも特に詠唱は関係ないということだ。
詠唱には特に意味がない、詠唱はもしかしたら意味がないのかもしれない。

後で考える必要があるな。
と、そんなことよりパンティー鑑賞会だ。
俺が唱えた魔法は決して強いわけではない。
しかし！　スカートを浮かばせるには十分すぎる魔法だった。
風は女生徒一人のみではなく、その周囲にまで影響を及ぼした。
過去一番の威力だったかもしれない。
ふわっと意図的ないやらしい風が巻き起こる。
校門付近での生徒の悲鳴が届き続いて男の「おぉぉぉっ！」という興奮の声が。
後であいつらには金でもとってやりたいな。
そんな中俺は目的だった女生徒のスカートが捲りあがる瞬間を見た。
視力には結構な自信がある俺は、しかとこの目で欲望という力を借りてか、いつも以上の視力で手に取るような鮮明さで見た。
スカートの中は可愛らしいピンク色のパンティー……とかではなく黒の、扇情的なパンティーだった。
予想外な色に俺はギャグのように鼻血を噴出し、木に隠れるように後ろへぶっ倒れる。
……風紀委員が風紀を乱すようなパンティーを穿いているなんて――最高だ。
人一倍大きな悲鳴が辺りに響いた。
悲鳴の声は俺を検査した女子――エッチな風紀委員のものだろう。
中々可愛い声だな。
できれば恥ずかしがってスカートを抑える姿も見たかったが、それどころではない俺は、何とか血を隠しながら紙を得るために外に備え付けられているトイレを目指した。
このままでは出血多量で死の危険性があるので、俺は早急に血をとめる手立てがほしい。
トイレの場所は体育館の近くにある。
遠くはないが、俺は無事たどり着けるか不安でたまらなかった。

血をここまで欲したのは初めてかもしれない。
俺は体育館が目に映るようになり、あと少しだと自分を勇気出させているその時に。
スカート捲りの目的だった学園のアイドルが体育館から姿を現すのが見えた。
隣には一人女がいて楽しそうに話している。
遠くからでも分かる美貌。どちらもレベルは高いのかもしれないがやはりアイドルと言われているほうがレベルは高い。
異世界での美女と張り合えるかもしれないレベルだ。
今まで関係ないとばかり思っていた俺は過去に一度も見ていなかった。
初めて見て、思った感想はすげぇなだった。
長い黒髪を揺らしながら歩き、優雅に微笑んでいる。
時々髪を掻き揚げる姿が、綺麗でそれだけで人を惹きつける力がある。
体育館から出てきたのは何かの部活に入っているからだろう。
手には部活用の鞄も持っているし。
俺はしばらく呆然としていたが、何とか思考を回復させる。
どうする……？
今、目標（パンティー）を拝むか？
今にもぶっ倒れそうなほどの俺が？
先程の風紀委員で大ダメージの、瀕死の俺が？
心に生まれる、二つの心。
天使と悪魔ではない。悪魔と悪魔だ。
今見て散るか。後見て散るか。
俺は人生最大とも言える選択を迫られている。
そして……。

「風よ、聖なる願望のために我に従い、スカートを捲り上げろ！ウィンド！」

興奮からついつい語調を強めに、言ってしまう。
やるしかないよな。例え、死んだとしてもそれはそれで満足な人生だったではないか。
それに俺には一つ考えがある。
さっきの風紀委員はギャップがあったせいで――つまりは予想ができていなかったせいであんな手負いの状態になってしまったはずだ。
だが、今は？
学校のアイドルである彼女のことだ、それなりのパンティーを穿いているはずだ。
だから、ある程度耐えられる自信はある。
言うなら予め攻撃場所が分かっている状態のようなもの。
もう一人の女子は見ない。欲張ってはマジでやばい。
風はうまい具合に地面から吹き、スカートを晒し上げ華麗に髪を掻き揚げている学校のアイドルのパンティーを……白日の下に晒した！
クマのあっぷりけが映る、子供用のを。
ぶばぁぁぁあ！
俺はＲ１８指定を受けるほどに血を放出して、それでも何とか姿を近くの建物の陰に隠す。
こっそり陰から顔を出して姿を確認する。
アイドルが恥ずかしそうにスカートを押さえ周囲を見回していたが……見つかっていないよな？
それにしても、なんというギャップ。
俺を殺す気か。
そもそも朝に二回もパンチラを拝もうとしたのがいけなかったのかもしれない。
さっき欲張ったら死ぬとか考えていたが……アイドルのパンティーを見ようとした時点ですでに欲張っていたんだな。

俺は鼻を押さえながら、ボロボロの体を引きずるようにして男子トイレという避難場所を目指した。

6　異常事態？　それとも覚醒？（前書き）

とりあえず、ストックがある今のうちは暴走列車の如くアップしていきたいと思います。
飛ばしすぎて後半ぶっ倒れないか心配です。
誤字・脱字ありましたら報告してくれると嬉しいです。

6　異常事態？　それとも覚醒？

鼻血が収まったのは朝のＨＲが始まる五分前ほどの時間だった。
慌てて、教室に駆け込みその後授業を受けていた。
機械的に黒板に書かれていることをノートに写し、先生の話で貴重な所をメモしていく。
つまらない日常。
朝を起き、学校で授業を受け、友達と昼飯を食べ、放課後部活をしたり、友達又は彼女、彼氏と遊びに行く。
どんなに充実していても学校生活は大抵こんな感じだろう。
これは随分と機械的だと思う。
毎日決められたことをする、受動的か、能動的とかあるかもしれないがそれでも変わらない。
大きく括ってしまえば結局は同じことの繰り返し。
それでも、朝は楽しかった。
自分の思うがままに欲望を満たす。
言葉だけをみたら捕まりそうだが、実際は可愛いものだと自負する。
楽しかった。
他に言葉が見つからないほどに。
あれが青春なのかもしれない。
俺はそんな気持ちを携えながら、授業を聞いていたらいつの間にか終了のチャイムが鳴っていた。
俺は委員長が出す合図で授業を教えてくれた先生に「ありがとうございました」と心を全く込めずに挨拶する。
そのまま次の授業の準備に取り掛かる。
壁に貼られている時間割で次の授業を確認すると『体育』と書かれている。
俺の、あまり好きじゃない科目だ。

今、俺がやっている競技はバスケットボールだ。
体育は選択制で大まかに言えば外と中の競技で分かれる。
俺は外――ソフトボールという俺がやりたくない競技――に出るのが嫌なので中の競技であるバスケかバレーボールのどちらかを選ぶかに絞られていた。
バレーはなんとなく嫌だった――というかある、うざい男に無理やりバスケに誘われた――のでバスケにした。
だが、俺のクラスにはバスケ部に所属している生徒が四名ほどいる。
さらに体育は二クラス合同でやるので結果バスケ部は六名もいる。
大抵、体育の競技は部に所属している生徒が活躍するのだ。
自重して手を抜いてやる生徒もいるが、今は違った。
男子女子とコートこそ違えど、体育館に女子もいるのだ。
つまり、男子はみんないいところを見せようとはりきっている浅薄なものが多いのだ。
女子なんざ、見てないだろ。
見ていたとしてもそれだけで「あの人かっこいい」とかなるわけないだろ。
単細胞共め。

「体育館行こうぜ！」

俺の学校での知り合いであるクラスの男が声をかけてきた。
あまりクラスの人間と親しくない俺は名前など覚えていない。
覚えていなくても「おい」とか「おまえ」とかで事足りるので問題はない。
ちなみにこいつがバスケに誘ってきたうざい男だ。
俺の中ではうざ男（お）で十分だ。

「いくなら早くしてくれ」

俺は今日は体操着なので着替える必要は特にない。
ちゃんと担任に説明――犬に襲われて制服を噛み千切られた――したので新しい制服ができるまでこれで過ごせる。
この格好は動きやすくていい。
俺は机の横に引っ掛けてある体育館履きを取り上げ、うざ男を無視して歩いていく。
うざ男も慌てた様子で横に並んでくる。
……なぜ男なんだ。女がいいな。
レベルの高い奴な。

「今日もバスケかね？」

「今日だけマラソンとかなら体育教師を張り倒す」

「だよなー」

無駄に笑ううざ男。笑顔は爽やかなはずなのか、どぶのように気持ち悪い。
何が面白いんだよと俺は半眼で睨む。

「今日こそ、ハットトリックを決めて女子の視線を惹きつけてやる！！」

「一人でサッカーやるのか、頑張れ」

俺はそそくさとうざ男から距離を取るように体育館へと歩く。
こんな馬鹿なことを言っている奴とは一緒に歩いていたくはないからな。
そのままのペースで体育館に入り、しばらくうざ男の話すつまら

ん会話を左から右へと流しながら授業が始まるまでの時間を潰す。
授業はすぐに始まり、準備体操をしたら各競技に分かれて軽い練習が始まる。
十分ほど練習をしたら試合が始まる。
クラスは二つ分だがチーム数は三チームのみ。
俺はうざい男と一緒のチームだ。
試合中やたらと俺にパスをするのはやめてもらいたい。
最初は俺が出るわけではないので座って目を閉じながら時間が過ぎるのを待つ。

「おい、試合だぞ」

男が俺を揺さぶる。
分かってるさ、ホイッスルが鳴ったんだから試合が終わったことぐらい。
なのに起こしてやったぞとドヤ顔で見てくるんだ。
気持ちからやめてくれ。
決して口には出さず、コートにあがる。
ジャンプボールで始まった。
こちらがボールを奪い、バスケ部の生徒と思わしき男がボールを持って突っ走っていく。
俺は体育では教師に怒られない程度に走り回るだけだ。
だから、あまりパスも来ることはない。
だが、今回は少々走りすぎてしまったようだ。
俺はちょうどシュートできる最高の位置に先に走っており、バスケ部の男から加減なしの強烈なパスを受ける。
あいつバスケ部にパスするつもりでやったろ。
パスした方も俺が捕れると思っていなかったのか驚いていやがった。

「へいへい！　橋武パスかもーん！」

俺の仲間でピカイチにうざい――うざ男がパスを要求してくるので、面倒だった俺はそちらにパスしようと思ったが、やめた。

かなり遠かった。

最初のジャンプボールをしたあたりでずっとパスを要求していた。

俺はこのくらいはチームに貢献したほうがいいかとレイアップシュートを決めようと心で一、二と歩数を数えながら、跳んだ。

俺は軽く跳んだ。軽い、本当に軽いはずだったのに……。

バックボードに頭を思いっきりぶつけた。

俺は羽をもがれた鳥のように体育館に墜落する。

なん、だ……？

俺は今、何をしたんだ？

普通にジャンプして、そしてバックボードに頭をぶつけた。

いやいや、あんな高いところまでかつて飛べたことないから。

羽でも生えていたか？　体育館に背中からぶっ倒れている今背中に不快感は特にないのでなにもないと思われる。

「大丈夫か！？」

体育教師が心配そうに走ってくる。

俺は色々考えたいことができたので保健室に行く旨を伝えて体育館を後にする。

あれはなんだったんだ？

7　覚醒でした

保健室につき、俺に特に外傷がないことは分かった。
確かに痛くはなかったからな。
俺は念のために冷やすための氷だけをもらい、すぐさま体育館に戻れと追い出されてしまう。
できればベットで横になりたいが、仕方ない。
俺は体育館に戻るために確かめたいことがあったので近くの階段まで行く。
確かめたいのは先程のジャンプのことだ。
あきらかな異常。確かバスケットゴールまでの高さは三メートルほどだったはずだ。
バックボードの一番下でも三メートルに近いはずだ。
俺の身長が１７５センチほどなので、跳んだ距離はおよそ一メートル。
それでも、バックボードがあったから止まったものの、実際はさらに勢いはあったはずだ。
二階に続く階段は十五段ほどあり、途中に踊り場があり折り返してさらに上がっていくものだ。
踊り場までは確実に三メートル以上はあり、俺は踊り場まで跳んでみようと思っている。
このくらいの高さまでは大丈夫だよな、というのが感覚的に分かるのが人間だ。
俺は今――余裕だなと思っている。
なんだ、この感覚は。
俺は軽くジャンプしてみると、ふわっと浮かぶように踊り場まで到達した。
……異常だ。
俺は成功したにもかかわらず心には満足感は生まれてこなかった。

魔法に続き、身体能力の異常。
これは異世界に召喚された影響からか？
さっきまで、一応日常を過ごしていた俺はふたたび夢ではなかったことを思い出された。
嫌とは思わない。
でも、これは今度から加減しないといけないなと疲れるようなことがでてきてしまう。

「プラス思考で行くか……」

言葉に出して、自分を勇気付ける。
そうだ。ここまで来たんだ、どこまで跳べるか挑戦してみるのも面白いかもしれない。
俺は三階建ての校舎を見据える。
三階建ての校舎は普段俺たちが勉強で使う校舎で、それぞれの階にはベランダが備え付けられている。
体育館は離れてしまうが、多少は大丈夫だろう。
俺は俺の教室がある校舎のベランダ側まで向かう。
まずは空き教室がある場所を確認。
一階はすぐに確認できたが、二階、三階は厳しいかもと思っていたが。
視力まで向上していた。
どうりで結構離れた場所からパンティーを手に取るように見えたわけだ。
ただ、自分で見ようと意識しない限りは強化前と同じ視力なので使い分ければ不便はない。
俺は一つ納得して、人が一人もいない教室の縦一列を発見してそこに移動する。
一階以外はベランダがあるので、俺はそれを利用して屋上まで上るつもりだった。

最悪失敗してもベランダがあるわけだしなんとかそこにしがみついてやる。
俺はふうと息を吸い、壁に向かって駆け出す。
ベランダにぶつからない位置を確認して、思い切り両の足に力を入れ、だせるすべてを持って跳んだ。
次に見たのは屋上にぎり届かない位置だった。
それでも俺は何とか小さいとつかみどころを見つけ壁に張り付く。
そのまま屋上まで登った。

「異常だ……」

ここまで清々しいと返って笑いがこみ上げてくる。
はっはっはっはと大きな笑い声を上げしばらく笑い続ける。
あまりにもおかしすぎて面白かった、こんなに笑ったのは久しぶりで、胸には楽しい気持ちが現れていた。
笑うだけで人は幸せに慣れると聞いた事があるが中々効果はあるようだ。
笑いが止んだ頃にはすっかり冷静に戻っていた明るい気持ちも共存していた。
冷静になった頭でなぜこんな事態になったのかを考えてみる。
はっきりしているのは異世界に行ったこと。
元々異世界に渡る魔法に影響があるのかもしれない。
何かの小説ではそうだった。
だけど、何か腑に落ちないものがある。
異世界移動魔法はただ単に異世界を渡る魔法なのだと思う。
他の答えを見つけてみよう。
異世界での他の異常な事態はなんだった？
マナに攻撃された、マナの魔力を貰った、マナに馬乗りされた、ぐらいか。
攻撃されて覚醒した？

それだとなんだか俺が変態のようだ。
魔力をもらって覚醒した？
……これかもしれない。馬乗りにされて覚醒したとしても変態だしな。
でも魔力をもらった恩恵はすでにある。
魔法が使えるというものが。
他に魔力には何か特徴があったが？
謎の病気があった。魔力を移す前に俺を怪我させた。
怪我？　そう言えば怪我は魔力を渡したときにゆっくりとだが治ったな。
そこで、一つ思い出した。
――魔力には体を活性化させる力がある。
傷を治すではなく、活性化させると言った。
つまり、マナの魔力を貰ったさいに体が活性化――身体強化ということか？
それなら納得がいく答えだ。そうなるとますます悲しい。
この力があれば異世界でも俺強ぇって無双できたかもしれないのに……こっちでは使い道がない。
くそうー！　なんで俺はあっさり戻ってきてるんだ！
あの時は死んでもあそこに居座るべきだった。
だが、そこで悲しいことに気づいた。
魔力が身体能力に関係するなら異世界人はみんな身体能力が高いんじゃないか？
ずーんと気持ちが沈んださ。日本の裏側に届くほどにね。
悲しんでいたが、そればかりもしているわけにはいかない。
そろそろ戻らないと体育教師に怪しまれる。
俺は屋上から飛び降りて、浮遊感を楽しみながら両足で着地する。
土に足がめり込むほどの威力ではあったが、足には多少の痺れ以外特にはなかった。

8　再開と嫌な出来事

力を持つものは力には溺れてはいけない。
俺は既に溺れているのかもしれない。
学校で下校までに十回近いほどのパンチラを拝んだ。
さすがに何度も見ると新鮮さが失われていくのだが。
頭を押さえて俺は何をやっているんだと嘆きながら歩いている。
こんどは制服でも吹き飛ばす魔法でも考えようかと思ったがさすがにそれは相手の気持ちを考え自重する。
俺は昨日と同じ帰り道を昨日とは違う気持ちで歩いていた。
ここは人通りが皆無に等しいので密かに俺が好きな場所でもある。
そして、俺はとんでもないものを見てしまう。
俺から数十メートル先――昨日俺が召喚魔法を喰らったところに黒い渦が浮かんでいた。
あれは……！
俺は逸る気持ちでその渦まで走る。
時間は五秒にも満たないものだったが、渦は消えてしまいそこには一名の美女――マナが傷を負って地に手をつけていた。
マナは昨日異世界で会った者。
再開できた喜びは会ったが、それよりもマナの体を見て息を呑む。
白い、雪のように綺麗な腕や足には無数の切り傷が残っている。
俺はマナを抱きかかえて話しかけるが、意識はない。
俺は何か情報はないかとマナから視線を外すと、僅かに離れた場所にもう二人の人相の悪い人間が立っていることに気づいた。
一人は頭にスカーフを巻き、短剣を持った小柄の男。
もう一人は大柄で顔には無数の傷を持っている男。男の手には大きな大剣があり、一度喰らえば一瞬で死ぬかもしれない。
ぞくっと背筋に冷たいものが走る。本能が伝える――敵だと。
体が無意識のうちに震え動けなくなりそうになったが、それを必

死に押さえて俺は二人を見据える。

「ここはどこだ？」

男二名は互いに似たようなことを呟きながら周囲を見回している。
その様子は戸惑いからくるもので、隙だらけだった。
相手は敵――俺の勘とマナのこの姿を見る限り断定できる――なのでここで攻撃したほうがいいのかもしれないが、俺は戦慄していて攻撃などできそうになかった。
マナを抱え、彼女の持っている剣を持ちながら数歩後ずさる。
正直落ち着く時間をもらえるのはありがたい、緊張を解くのに何度も深呼吸できるからな。

「おい、あんたその美女渡しな」

だが、その時間も多くはない。
俺が五歩ほど歩いたときに男のでかいほうが俺に手を向けてくる。

「なんのためにだ？」

声が震えていなかったのは深呼吸のおかげかもしれない。
俺はまだ震える手を爪をたて、痛みによりなんとか堪え睨むように男を見た。
ビビッているのがばれれば敵を付け上がらせるだけだ。

「そんなの奴隷をほしがる貴族に売るためさ。そんな上玉中々いねぇからな」

げはははと気味の悪い笑みを浮かべる。
にやにやと小柄の男も笑う。

二人の気味の悪い合唱を聞きながら、俺は考える。
逃げるか、戦うか。
俺の身体能力が高いのは午前に判明しているので、逃げようとすれば余裕かもしれない。
否定する考えが浮かぶ。
相手も異世界人なんだ。魔力を持っているのだから身体能力が高い可能性もあるかもしれない。
これも考えていたことだ。
それなら戦うのがいいのか？
絶対に無理だ。
身体能力が仮に同じだとして、素人と歴戦の――少なくとも見た目はそう見える――相手じゃ勝てる気がしない。
なら、周りに助けを呼ぶか？
仮に相手が俺の身体能力と並ぶなら、助けを請被害は大きいだろう。
結局は俺が何とかしないといけないのか。
俺が、何で俺なんだよ、くそ。
異世界に行きたいという意思は完全になくなり、俺は震えていた。
死ぬのは、怖くないはずだったが。今日一日で人生が楽しいことに気づけた。
これからも楽しく生きられるかもしれなかったのに。
そのうち、体を透明にする魔法でも開発して女子風呂とか女子更衣室とか侵入してやろうと考えていたのに。

「早く、渡せよっ！」

男が俺を殴る。
俺は反応することができずに、拳をまともに受けて僅かに顔を横に向ける。
ただの威嚇で、それでも十分な力を含んでいる。

俺は拳を受けて、先程までの卑屈な考えはすべて吹き飛びにやりと笑みが漏れた。
勝機ありだ。
男の拳は本気ではない。それでもマナから俺を突き放す程度の力では殴ったはずだ。
それでも俺はほとんど効かなかった。
確かに痛かったが、耐えられるレベルだ。
俺はバックステップで男から距離を取り、マナを地面に下ろす。
もしも、これが本当に男の軽くなら俺は死ぬかもしれないが、もう悪い考えはしないようにする。

「剣借りるからな」

幸い、周りに人はいない。
この道を選んで歩いていたのは不幸中の幸いだったな。
多少暴れても大丈夫なはずだ。
俺は大柄の方を先に倒すつもりで駆ける。
二回だけ踏み切っただけで大男の懐に踏み込み、反応される前に拳を懐に叩き込む。
男はくねっとくの字に曲がり大げさなくらい飛んだ。
よしっと俺は満足に微笑えむ。さすがに敵だからと言って殺すわけにはいかない。
第一に俺にそんな勇気はないし。
自分でも甘いと分かっている考えを持っているせいで油断していた。
左斜め後ろ――ぎりぎり視界で捉えることのできる範囲から小柄の男が短剣で攻撃してくるのが見えた。
俺は反射的に己の剣で受けるため振り返り、に相手の剣に当てる。
打ち合って相手の得物を止めたら拳でとどめを誘うと思っていたら力を入れすぎた。

男の短剣を破壊してそれでも剣はとまろうとはしない。
俺は必死で止めようとするが一度動き出してしまったエネルギーを止めることはできずに……俺の剣は男の首に当たる。
剣が当たって一瞬は弾かれるような感覚が手に返って来たがそれもなくなり、俺の剣は勢いよく男の首にめり込んだ。
男は声をあげることもなく、一気に倒れ身動き一つしなくなった。
一瞬俺は何が起きたのか分からず、倒れた男を見ていた。
辺り一面に血、血、血。

ようやく、頭が理解し俺の心に人を殺したとい罪悪感が溢れ出てくる。
死んだ、のか？
ちょっと待ってくれよ。
俺が剣を振って、死んだ？　なんで？　俺は怪我しないように加減した。
俺が殺したのか？
違う。違う。違う！
俺じゃない。
勝手に死ぬんじゃねーよ！

「おい、ふざけんなよ、生きてんだろ！」

俺は剣が手から零れ落とし、死んだ男の襟首を掴んで振り続ける。
男はぼろいぬいぐるみのように首をただ振り続けるだけで何も反応しない。

「うぉぉーー！」

俺が小柄な男に気を取られている間に大柄な男が復活して俺を襲ってくる。

振り回された大剣を俺は避ける。
大剣はアスファルトの床を破壊して、その破片がこちらに飛び散る。
俺は威力のやばさに無我夢中で、左足に力を入れる。
勢いを右足に持っていくようにして男へ悲鳴をあげるように右足の回し蹴りを喰らわせる。
ぐききと、男の骨が折れる嫌な音が脚越しに伝わってくる。
男は吹き飛び……頭を壁にぶつける。
壁は壊れ、そして男の首は曲がってはいけない方向に曲がっていた。
――死んだんだ。
二度目は悲しみは訪れない。
ただ、殺したという事実だけが俺の心を締め付けて。
俺はどうすればいいのか分からず、その場にへたり込む。
殺した、二人も。俺が殺した。
「うわあああああああああああ！！」
俺は、どうすればいいのか分からずひたすら叫び続けた。

9　思い出したくない、だから俺は逃げるんだ

時間は大して経ってはいない。
だが、俺はすぐに冷静さを取り戻した。
取り戻さなければいけなかった。このままここにいたら俺は現行犯逮捕になってしまう。
時間は大して経ってはいない。
だが、俺はすぐに冷静さを取り戻した。
取り戻さなければいけなかった。このままここにいたら俺は現行犯逮捕になってしまう。
まだ誰にもばれていない今のうちに証拠をもみ消す必要がある。
俺は警察のお世話になるのは嫌だったので、すぐに二人を消滅させることに決めた。
二人の死体を一纏めにする。
そのときにはもう、悲しみがこみ上げてくることはなかった。
人を殺したほうが俺にとってはショックだったのか死体を見ても特に感想がでてこない。。
死体をとっとと処分したい思いから火の魔法を放つ。
初めて使う火の魔法がこんなところだったか。
火の魔法は単純に「ファイア」と詠唱ありで言っただけなんだが今までのほかのどの魔法よりも威力はあった。
あっさりとはいかなくてもすぐに死体は業火で焼き尽くされ、道にたくさん流れた血をすべて水の魔法で洗い流した。
水の魔法も過去最高の威力だった。
俺は精神的に憔悴した体でマナの体を背中に背負い、家まで歩いていく。
あの道はもう使わない。
思い出しただけでも体が震えだす。
一瞬で動かなくなる人。

あれほどまでに脆いものだとは思っていなかった。
人を殺した事実はしっかりと体に刻まれ、俺を苦しめていた。
今日から寝れないかもしれない。
震える体を引きずるようにして家にたどり着き、玄関の鍵を開けリビングに入ることもせずに玄関に倒れこむ。
疲れてはないないが息が切れていた。
人を殺した事実は思い出したくない。
死体を見るのは大丈夫だが殺すのは駄目だ。
いや、殺したから死体を見るのが大丈夫だったのかもしれない。
どっちでもいいが、そこで呼吸を何度もして自分を落ち着けてからマナの体を見る。
このまま大きな胸でも揉みしだいてやろうか。
そんな気分になると少し自分が落ち着きを取り戻せるのが分かった。
傷を見る。
血は止まっているがまだ傷はある。
だが、どれも致命傷ではなくすぐに治りそうだった。
（回復魔法なんて……あるのか？）
事ここに至り、一番安全だと思われる回復魔法を今まで考えもしていなかったことに気づく。
それでも俺は何とか、考えとりあえず詠唱文を考える。

「癒しの光よ。目の前の者の傷を癒せ。……ヒール」

俺は思いつく回復呪文を呟き、マナを回復させるためにえいと両手をつき出す。
俺の勘での魔法発動だが、どうやら失敗したらしい。
あの世界には回復魔法がないのか？
それとも回復魔法はちゃんとした詠唱などがあるのだろうか。
ただ、今は回復魔法については考えている時間は無い。

大した傷ではないが傷は傷だ。治しておくに越したことはない。
俺はふと、あることを思い出す。
魔力だ。魔力は当てるだけで対象の傷をゆっくりとだが治していた。
魔力を使った治療をしよう。
俺は決意してすぐさま魔力を感じてみる。
いまいち感覚の問題なので理解できなかったが……数秒後。

「うおっ！！」

俺は思わず声をあげてしまう。
声をあげた理由は――自分の魔力に恐怖したからだ。
俺の体内にある魔力――体の中で蛇のように駆けずり回っているもの――はあまりにも多く、そして歪だった。
正しい魔力を知らないが歪んでいると思われた。
この魔力は危険だ。俺は悟り、直接魔力をぶつけるという乱暴な治療をするのはやめにする。
マナを担ぎ上げて、リビングにまで運びソファに横にする。
救急箱を持ってきて、絆創膏などで傷を塞いでいく。
今まで他人の傷の手当てなどしたことがないのでどうすればいいのか分からなかったがそれでも続ける。
大体見える範囲の傷を塞ぎ終えた俺は、ごくりと唾を飲み込む。
む、胸のなかとかも怪我してるかもしれないから見ていいよねっ！
もちろん服に傷がないことから中はまったく怪我してないのは予想できるが、それでも何かあってはいけないよな。
と俺がゆっくりと手を伸ばしていくと――。
ぱちり。
と聞こえそうなほどに綺麗に目が開いた。
底まで見える川のように透き通るサファイア色の瞳だけを動かして俺の方を見る。

何もできることがない俺は手を伸ばしたままアホのように固まっていた。

「よ、よう」

視線に耐えかねた俺がなんとか言葉を取り出す。

ゆっくりと手を戻しながら。

マナは、むくりと起き上がり自分の腕などを見始める。

な、なにもしてないぞ……まだ。

怪我の治療はしたが他には何も。

やましいことは何もな。

「確か、ゴウだったな」

落ち着いた声音で名前を呼ばれた俺は無意識のうちに背筋を伸ばしていた。

「そうだ」

「この傷の手当は君がしてくれたのか？　随分と下手だが……」

「はっきりいうなぁ。まあ、誰かの手当てなんざしたことねーし。俺怪我しねーし」

「そうか、ありがとう。それより私の異世界召喚魔法についてきた盗賊は？」

きょろきょろと周囲を見回すマナの発言で、俺は逃げていた現実と向き合わされてしまう。

盗賊、と聞いても俺の罪の意識が消えるようなことはなかった。

消えてくれれば、どれだけよかったことか。
俺が自分のやったことがつらくて唇を噛んでいると。
マナは、ぽんと間抜けな音を出して手を打っていた。
「君が倒してくれたのか？」
「倒す、じゃなくて……」
言いづらい俺が言い切る前に、
「ありがとう」
マナは両手で俺の手を包み込むときらきらとしたまなざしで俺を見る。
そんな目で見るな。
俺は人を殺したんだぞ！
尊敬の念が篭っている視線に耐え切れず、俺は手を払い立ち上がる。
「俺は、あの二人を殺したんだよっ！」
言いたくはなかったが、口を切って出てしまう。
だが、女はぽかんとして俺に怯える様子はない。
それどころか俺の言っている言葉の意味が分からないといった感じで首を捻っていた。
「それはそうだ。あの二人は盗賊で人に害をなすものだ。死んで当然だ」
マナの淡々と言った言葉に俺は信じられないと目を見開いた。

冷徹な物言いだ。
だが、しかし間違ってはいない。
あの二人は向こうの世界で奴隷商人のようなものだと自称していた。
それはつまりすでに向こうでは何人も人を殺したようなことをしてきたと言う事だが……今まで誰かを殺したことがあるわけがない俺にはそんな簡単に割り切ることが出来ない。
それも平和ボケした日本で暮らしているような俺には理解ができなかった。

「どうしたんだ……？　風邪でも引いたか？」

「違う。……割り切れるかよ」

「割り切る？」

全く言葉が通じない相手に俺は再度怒る。

「例えなぁ！　あいつらが酷い奴だったかもしれないけどさ！　それでも俺は殺したんだよ！　力の加減を誤って、本来なら殺さずに捕まえる事だってできたかもしれないのに！」

「捕まえてどうするんだ。大人しくしていると思っているのか？」

大人しくしているとは思えない。
でも、でも。

「でも、嫌なんだよ……自分が人を殺めた事実が」

「なら、お前は私を見捨てればよかったのだ。お前は私を助けよう

としてあの二人を殺してしまった。……すまない。私のせいだな」
マナは自分で言っていて気づいたのか謝ってくる。
……俺が悪いのは知っている。マナに押し付けることなんてしない。
だけど、マナの言っていることは少し理解できた。
俺は誰かを守るために手を汚した。そう思えば多少は罪の意識も弱まる。
でも、俺はあの時助けようとした。自分の意志でそう思ったんだ。
もし、マナを見捨てたら？
もし、マナを抱えて盗賊から逃げたら？
被害はあったかもしれない。今度は俺でない誰かが悩み、苦しんでいたかもしれない。
こうなったら、多少自惚れよう。
俺が殺したのは守るため。俺の代わりに誰かが苦しむのが嫌だったからああした。
そうやって考えると多少は胸が軽くなっていく。
俺は何度か深呼吸をして、日常生活に支障をきたさない程度は落ち着きを取り戻す。
悩むのはやめよう。殺した事実は変わらないので殺してしまったことをいつまでも悩んでいては前に進むことは出来ない。
それでも……何かのきっかけがありあれを思い出したとき俺の体はがたがた震えてしまうかもしれない。
「マナ……。マナは人を殺したことあるのか？」
「私は、たくさんあるぞ。と言っても私に害を与えてくるもののみだ。それ以外を殺したりするような非情な人間ではない」
「そっか」

同じような人がいると知れ、さらに胸につかえる黒いもやのような罪の意識が多少なりとも消えていく。
俺はマナのおかげで多少、前向きになれたかもしれない。
所詮多少だ。

「とりあえず、聞きたいことは山ほどあるけど……飯にする？」

「うむ！」

嬉しそうに目を輝かせる。
なんともマナはよく分からない。
喜怒哀楽が激しいというかなんと言うか。
俺は考えることを先延ばしにしたんだ。
記憶の隅の隅に飛ばして、思い出さないように……逃げることにした。
逃げないと、俺が俺を保てるとは思えなかった。

10　異世界の情報

夕飯を食べ終えた俺は少し休憩したい気分だった。
マナからは事情を聞いた。
マナから聞いた情報は多く、まだそれでもすべてを聞いてはいなかった。
他の世界の情報を短時間で聞けるとは思っていなかったが、疲れた。
マナは現在風呂――風呂は似たようなものがあるらしい――にいるのでこんなに何回もため息をつけるのだが。
さて、落ち着いてきたところで俺は驚きの事実を少しずつまとめていこうと思う。
まず、ディフィトというマナの異世界の共通語が……日本語だった。
マナにマナの世界の文字を書かせたからこれははっきりしている。
もしかしたら異世界に通った俺は特別にそう見えるだけかもしれないが（マナもこちらの世界の文字をなんなく読める）そこは気にしない。
次になぜ、マナがこちらの世界に来たのかというと。
旅をしている最中に盗賊に襲われたからだ。
盗賊は二十人ほどいて、戦うのは無理だとあきらめて逃げようとしたが逃げ切れず最後の賭けに異世界召喚魔法で自分を召喚――こちら（地球）の世界から召喚させるようなイメージらしい――で行ったら成功したが、悪あがきとばかりに二人ついてきたらしい。
思い出したくないのでここで終わりにする。
マナは自分の傷をすべて治した。
魔法について詳しく聞いたら、大きく分けて攻撃魔法、回復魔法の二つがあることが分かった。
大体予想は出来ていたが、回復魔法は使える人間が決まっている

らしい。
回復魔法は自分を回復させる魔法と他人を回復させる魔法があり、前者は誰でも使え、後者は特別な人しか使えない。
前者の使い方は魔力を使い細胞を活性化させる、簡単なもので俺でも使えるらしい。
後者は先天性の才能がなければ使えず、使えるだけで人生ばら色らしい。
回復魔法についてはさらに細かく色々あるらしいが俺も詳しくは理解していないのでここらへんでいいだろう。
後、魔力が増え続ける病気についても詳しく聞いた。
他人に魔力を受け渡す際には自分の魔力を検査して相手に影響が出ないかどうか調べなければならないらしい。
時間と金がかかる大変なもので、だから俺を召喚したそうだ（俺が聞いたときアンテナのような髪をだらんと元気なくさげていた）。
もし、自分の魔力を受け付けない場合は……あっというまに相手が死ぬらしい。
初めっから魔力の持たない相手に使えば大丈夫だと思ったから俺を召喚したらしい。
実際は大丈夫ではないが――身体の異常など――死んだりするようなことはないので大丈夫と言えるのだろう。
一通り俺の悩みというか疑問は消えたのでよしとしよう。
ふうと背伸びをして、いつ自分の人生に終わりが訪れるか分かったもんじゃないのでゲームを起動させる。
今やってるのは王道のファンタジーゲームだ。
もうすぐクリアできそうだ。
「ふむ、服がないんだがどうすればいい？」
「あー、そうだったな。俺のジャージでいいか？」

「じゃーじ？　がなんなのかは分からないが……それで構わない。む？　なにをやっているんだ？」
「ＲＰＧっていう魔法とかを使って悪い敵をやっつけるゲームだ」
「げーむ？」
「ああ、詳しくは説明できないけど現実ではありえないようなものの総称だ」
「そうか……それより、じゃーじはどこだ？」
「……お前、変な格好でうろつくな」

俺はついついゲームに夢中になりマナの方を疎かにしていた。
悪いことだと理解してるさ、でもな。
なんで裸でうろちょろしてんだこいつはっ！！
衣服をつけていないにもかかわらず張りがある胸は大きい。
俺の両手で握ってもきっと溢れるだろう胸の下に視線を送る。
っていかんいかん！
これ以上下を見るのはやばい。
というか、ちょびっと鼻血が出てきたじゃないか！
「タオル巻け！」
「お前がさっき言っていた体を拭くやつのことか。あいつは好かん」
「好かんじゃねぇ！　ってさっさと服をもってこねーと……」
「そうか、なら私がげーむとやらでもやらせていただくか」

「待て待て！　セーブさせてくれ！」

俺はいじくられる前にセーブしてゲームを落とし、前にクリアしたゲームにソフト入れ替える。

相手は初心者だ。絶対セーブデータを上書きする。

だからゲームを変えたのだ。

目を輝かせコントローラーを逆に持ち、ゲームを始めるマナの背中を見る。

すべすべとしていそうな綺麗なうなじについ手が伸びてしまい、俺は慌てて引っ込める。

タオルで拭いただけでまだ湿っている髪からは、俺が使っているシャンプーを使ったはずなのになぜかいい匂いがしてきて、頭の中がぼぅとするのを感じる。

やばい、と顔を叩いて理性を呼び戻しリビングから出る。

自分の部屋からジャージと下に着るシャツを取り出し、急いでリビングに戻りジャージを投げ渡す。

「ほら、これでも着てろ」

「これか？　ふむ……」

ごそごそと衣擦れの音がして俺は耳を塞ぐ。

目はとっくの昔に塞いでいる。

何も聞こえない俺はもう終わったか薄目を開けて確認すると。

ほっ、問題なく着替えられていた。

「じゃあ、俺も風呂はいってくるからな」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

「んあ？」

マナに呼び止められたので、俺はリビングの入り口で振り返る。
マナはテレビを指差し、

「げーむが進まん」

俺はコントローラーの持ち方や、ゲームの進め方、ステータスの説明を分かりやすく説明してやった。
とっとと風呂入って今日は寝たいんだが。

11　魔法の再実験

お前を殺してやる。
小柄な男がなぜか身動きをとれない俺の首に短剣を突きつけてくる。
それが消えた瞬間、次は大柄な男が大剣を振り上げ俺に何かを言う。
よくも殺しやがったな。
『呪ってやる』

「うわぁぁぁぁーー！！」

次の日の朝。
俺は昨日殺した二人の盗賊が出てきてそれぞれが持っている武器を突きつけてくる夢を見た。
悪夢だ、体が震えている。
そのせいで俺はいつもより早く起きしてしまった。
俺はこのままここにいても気分が悪くなったままなので、気晴らしに散歩に行こうと思った。
マナはまだ寝ている。
俺はマナを起こさないようにそっと家を出て外を歩きながら昨日の出来事を忘れるために考え事を始める。
魔法についても昨日マナから聞いている。
魔法は詠唱ありと詠唱なしの二つに分けられる。
魔法を使うには詠唱ありの方が使いやすく、威力が高いらしい。

まず魔法を覚えるには詠唱ありでの練習から入るらしい。
それから詠唱なしでの魔法の練習をするんだが、なぜ詠唱ありのほうから始めるのか。
魔法の詠唱は精霊に呼びかけるものだとマナは言っていた。
詠唱をすることにより精霊が力を貸してくれて、魔法の威力があがるという効果がある。
必然的に魔法が成功しやすくなるのだ。
俺が気になったのは精霊が力を貸してくれるというところだ。
マナは昨日「この世界には精霊がいない」と説明している最中に言っていた。

つまり、俺の魔法はなんだったと言うのか。

俺には何の練習もなしにいきなり魔法を使えるほどの才能があるのか？
にしては魔法の威力はないし、無詠唱で使えるわけでもない。
言いたいことはディフィトという世界には本当に精霊がいるのかどうかということ。
例え、いたとして本当に力を貸しているのかどうかいうことだ。
そして、今までの魔法使用を思い返してみて重大なことに気づいたのだ。
俺の魔法の威力はパンチラを狙ったときのみ威力があがっているのだ。
好んで思い出したくはないが死体を処理するときも威力は上がっていた。
やばい、また体が震えてきてしまった。
事態を先延ばしにして逃げる道を選んだが……やっぱり逃げてるだけではずっと恐怖に襲われることになるようだ。
深呼吸してまた記憶の隅に追いやる。
つまり、魔法については単に慣れた、と片付けるには勿体ない気

もするので俺はある結論をはじき出した。
魔法はイメージの力、想いの力。
恥ずかしいな、おい。
心の中でのことだが思わず赤面しそうだ。
俺が無詠唱のときに魔法を使おうとしたときは、何も考えずに言っていた。
だから、細かく考えることが出来れば？
つまり魔法として具現するのではないか。
俺は近くの川に来ていた。
ここに水の魔法を打ち込もうと思っている。
頭の中に水が上から流れ落ちるのをイメージし、それをそのまま具現させようと手を振り下ろし、

「スプラッシュ！」

俺の言葉に続いて弱弱しい水がひょろひょろっと落ちてきた。
しょんべんか、これは。
老人がしょんべんでもしてるんじゃないかとキョロキョロ周囲を見回してしまいたくなるくらい悲しい。
イメージしてできるようだな……魔法の質は最悪だが。
俺が心で考えているときに魔方陣がでたので、やはり成功だ。
こうなるとディフィトでの魔法の使い方が疑いたくなるな。
俺は川辺で横になり、この先のことを考える。
マナはいずれ元の世界に戻るだろう。
そのときに、俺は。
俺はどうしたいんだろう。
ついていくか？　それも一つの選択だろう。
あれほどの力を持ってしまったのだ。
隠して生きていけるかどうか分からない。
魔法は使わなければいいが身体能力のほうはすでに隠せていない。

昨日はバスケ部にスカウトされたからな。
ただ異世界について行ったとして俺は何かできるのか？
もし、また盗賊とかと戦う羽目になったら。
俺はその時動けるかどうか分からない。
それに、まだ昨日のことはしつこく脳内にこびりついている。
美少女ハーレムを作るため――自分の力を隠すためにそこまでする必要があるのか分からない。
散歩のおかげで体の震えは止まった。
俺は考えがまとまらないまま、家に帰り朝食を食べて学校に向かった。

12　友達は大切にしろよ

マナには外に出ずに家で好きなだけゲームをやっていいと言ったので大人しくしてくれるだろう。
俺はマナに文字を書かせたいくつかの紙を持って、教室で寝ていた。
昼休みに入り、学校は騒がしい。
先にコンビニ弁当を買っておいた俺は購買のパンの奪い合いに参加する必要はない。
うざ男は俺が昼飯をたべる唯一の友と言ってもいい。
普段は相手が勝手に来るのだが、今日は俺から誘った。
別に一緒に食べたいわけではない。
用があるのだ。

「おう、パン買ってきたぜ～」

なぜかぼろぼろの顔面に青あざを作ったうざ男が俺の前の席に座る。
俺は言葉をかけずにコンビニで買ったおにぎりを貪り、用件を伝える。

「おまえ、この紙の文字読めるか？」

俺が見せた紙はマナに書かせた文字があるものだ。
『マナ・ベアティ』『ぎゃるげー』『げーむ』
と書かれている。

「マナ・ベアティ。ぎゃるげー。げーむ」

うざ男はあっけらかんと悩む素振りを見せずにすべて言い当てた。
これで、疑問は解消したが新しい疑問が増えたな。
向こうの世界が日本語が共通語だということ。
これは分かったが、逆になぜ日本語が共通語なのかという疑問が出てきてしまった。

「なんだよ、何かのクイズか？」

説明する必要もない。

「ああ、そうだ。分かるか？」

適当に話を合わせて終わりにしよう。

「うーんとなぁ……ゲームの意味が二つもあるんだよな」

ぎゃるげーとげーむのことか。
パンを机に置いて、真剣に悩み始めたので俺はまだうざ男が食っていないパンを奪いすべて食べてやった。
胸を溶かさんばかりのどろどろと甘いメロンパンだった。

「って、なに人のパン食ってんだよっ」

「悪い、俺は甘いパンはあんまり好きじゃないんだ。次からはカレーパンでも買ってきてくれ」

「ああ、ごめんな……ってそれ俺のパンだから！　謝る場所おかしいだろ！」

「おっ、あそこに歩いているのは学園のアイドルじゃん」

嘘ではない、本当に廊下を横切るのが見えた。
俺がいる一階は一年生の教室なので二年の彼女には用はないはずだが……まあ、深く考
えても仕方ないな。

「おっ、ほんとだ。……話を逸らすなよっ！　謝れよ！」

「そういえばあの人お前のこと気になるって言っていたぞ」

「マジでっ！？」

「ああ、確かな情報だ。試しに告ってみれば？」

友達がいない俺がそんな情報を持っているわけがない。
全部嘘だ。

「ちょ、ちょっと行ってくる」

「ああ、ちゃんとパン置いて行けよ」

「ああっ！　もしも俺に彼女できたとしても恨むなよ」

「むしろ喜ぶさ。厄介払いができてな」

既に姿はなく、残ったのは食いかけのあんぱんとまだ手のつけられていないやきそばぱんのみだ。
俺はやきそばぱんを口に頬張り、教室にいてはうざ男の奇襲にあいかねないので校庭の日陰を求めて旅にでた。

１３　会話のみ。※ストーリーとは関係があまりありません（前書き）

今回はマナと轟の一週間の生活の様子を記した物で、地の文がありません。
読みにくかったらすみません……。

１３　会話のみ。※ストーリーとは関係があまりありません

「なあ、ゴウ」

「なに？」

「このダンジョンのボス強くないか？」

「ああ、そいつと戦う前にダンジョンの謎解きをする必要があるんだよ。全部で六個ある

謎をとけばかなり弱くなるはずだ」

「なるほど……」

「謎解きはできるのか？」

「できない」

「分かった、教えるよ」

「ゴウ、この武器装備したら変な音がなったぞ。おどろおどろしい音が」

「それ呪われてんだろ。御祓いしないとなおんねーと思うぞ」

「どこでやるんだ？」

「まずダンジョン出て、近くの町に行け」

「そろそろこのダンジョンクリアできそうなんだが……」

「だったら、先に進むか戻るか。自分で決めろ」

「そうか。なら私は進もう。気持ちをしっかり持てば例え呪われていても行動できるはず

だしなっ！」

「ゲームだから気持ちもへったくれもないんだが」

「ラスボス倒したのになんか変身したぞっ！」

「ああ、大抵ラスボスってのは『ふはははこれが私の真の姿だー！』とか言って二、三回

変身すんだよ」

「なるほどな。なら私もラスボスになれば二回くらい変身できるのか？」

「聞くまでもない。できるはずがない」
「……悲しいな」
「おまえの頭がな」

「な、なんだこのゲーム！」
「ど、どうした！？」
「可愛らしい女の子が、上半身のみ映ってるぞ！！」
「やめろーーー！　それ以上みないで！」
「『ロリなわたしは嫌ですか？』なんだこのタイトルは？」
「ぬおーー！　これだ、このゲームに換えろ、今すぐに！」
「わ、分かったが……ロリとはなんだ？」
「説明をするつもりはありません」

「どうだ、パーティーメンバー全員私の名前だぞ」

「……こ、怖いな」

「だがな、問題があるんだ」

「ん？」

「このゲーム、名前とＨＰとＭＰしか戦闘中は表示されないだろ？」

「そうだな」

「……時々誰が誰だが分からなくなるときがあるんだ」

「名前変えろ」

「このゲーム魔法がないのか！？」

「あるだろ」

「でも、全員が使えないじゃないか！」

「時々あるんだよ。選ばれたものしか魔法が使えないとか」
「なぜみな選ばれない！」
「いだっ！　イラつくからって頭殴るなよっ！」
「私は憤慨しているっ！」
「言わなくても分かってる」
「もう、このゲームはやらん」
「やらなければいいだろ」
「だが、エンディングが気になるのでゴウにやってもらう」
「自分でやってくれ、頼むから」
「分かった」
「……もうお前の事まじで分からん」

１４　異世界への決意（前書き）

すみませんでした！
９話と１０話がダブっていることに気づかず、アップしていました。
これは今日（８月１８日）更新したものを編集で新しいたものにチェンジしました。
最後のストックです。現在頑張って執筆中です。

１４　異世界への決意

マナが来てから一週間が過ぎた。
マナの特徴も分かった。
マナは天然で、基本アホだ。
さらにマナはゲームに多大な興味を持ち、一日中テレビの前に陣取っている姿は毎日見ている。
異世界人よ、いいのかそれで。
少なくとも『箱の中で人が動いている』とか古典的な反応でもいいのでしてほしいものだ。
暇さえあればニュースも見て、この世界の常識を手に入れているので車を見ても驚いたりはしてくれない。
こっちに永住するんじゃないかと疑いたくなるほどの順応ぶりだ。

「私は明日向こうの世界に戻るつもりだ」

とか考えていた矢先にこれだ。
俺は呆気にとられて間抜けな顔でしばらくマナの背中に視線を注いでいた。

「ま、まじで？」

「ああ、さすがにいつまでもこちらにいても迷惑だろう」

迷惑、ではなかったな。
楽しかったし。
マナと一週間過ごしたおかげで最近はマナに遠慮がなくなっていた。
軽口を言い合えるほどに。

それに俺自身多少社交的になった。
うざ男とも話す頻度が増えているのが明確な証拠だ。

「なあ、俺もついていっていいか？」

俺はほぼ何も考えずに言っていた。
言った俺も驚いている。
でも、ついていきたいのだと思う。
今のは何も考えていないから素直な気持ちなんだろう。
よし、マナについていこう。
ロリロリな女の子にも会えるかもだしな。
マナは驚いた様子で、振り返りしばし悩む素振りを見せてから、

「私は問題はない。ただ、君にはこちらの生活があるんじゃないか？」

「いや、大丈夫だ。もうすぐ夏休みっていうのがきて、長い間学校にいかなくてよくなるんだ」

「……あちらの世界では大げさだが、人殺しは日常茶飯事に起こると思っておいたほうがいいぞ」

「……それも大丈夫だ」

全然駄目だ。
マナに言われた瞬間にフラッシュバックするように斬ったときの感触が蘇ってくる。
時間が経てば経つほど悪い方へ悪い方へと考えが向かい、殺したときには感じなかった吐き気が今はこみ上げてきた。
でも、年がら年中人殺しがあるわけではないはずだ。

マナだって進んで人を殺したくはないはずだから、最悪一緒に逃げればいいだろう。
彼女はそんな俺の様子には気づいてはいないがまだ、悩んでいる。
ただ、頭を振り「最後に」と前置きをする。
「君には多大な恩がある。だから、君がついて来たいと明白な意思があるのなら止めたりはしない。だから、先に言っておくことがある。私は旅をしている」
「旅……？」
「そうだ。私は自分を育ててくれた家族を探している。だから、君にも何かちゃんとした理由があるなら私はこれ以上なにも言わない。君が私についてきたい理由は？」
俺が、ついていきたい理由か。
理由ならいくつかある。
自分の力の使い場。美少女ハーレム。
そして、つまらない日常からの脱却。
どれも俺にとっては重要なことで、でもやっぱり。
美少女ハーレムを作りたいのが一番強いな。
それを言うのは憚られたので、俺は無難なものを選んだ。
「自分のやりたいことを見つけたいんだ。この世界じゃ、俺は機械のように毎日を過ごしているからな」
「機械のように？」
「ああ、機械だ。毎日決められたことをしているだけ。周りが高校に行っているから俺も高校に行ってるし、たぶん周りが大学に行く

から俺も大学に行く。自分の意志がないんだ。だから、自分の意志を持ちたい」

一番の理由はロリな女の子に会いたいからだが。

「……なるほどな」

マナは大人のような笑顔を浮かべて、

「なら、明日……いや明後日に出発だ。それまでに必要なものをそろえておくようにな」

思わずどきっとするような笑顔を見て、俺は顔を逸らして「分かった」とごにょごにょと言った。

15　異世界まで一日を切った

次の日の夜。
俺は今朝家族に連絡をした。
しばらくやりたいことがあるので学校を休んでもいいかと。
そしたら、後悔しないのなら好きにやりなさいと言われた。
俺の親はいい親なのかもしれない。
普通理由も聞かずにそんなことをいえるとは思えない。
もしかしたら俺の事はどうでもいいと思われている可能性もなくはないが。
学校のほうには連絡をいれておくからと言われたので早めの長期休暇だ。

旅行前の小学生か！
と突っ込みたくなるぐらい今日の俺のテンションは高かった。
学校ではうざ男に引かれるという稀有な体験もしてしまったしな！
いやぁ、異世界。
明日異世界かぁ。
俺は旅の準備をしながらふと思った。
どんな場所なんだろう。
空を見上げたらドラゴンとか住んでいるのだろうか。
異世界に夢を馳せるのもいいが……第一に武器がない。
マナは剣を持っているが俺はどうすればいいのだろうか。
いくら身体能力が高いと言っても初心者である俺が剣を握ったてもたかがしれているので武器はそれ以外にしたい。
盗賊の件があったから剣は使いたくないしな。
そういえば盗賊の武器もあったな。

マナに渡すと、向こうで金にしようとか言って変な箱にしまっていた。
それは置いといて。
俺の武器は拳や蹴りを使った格闘戦か。
特に武術を習っていなかった俺でも何とかなるだろうか。
いや、なんとかしないいけないな。
マナについていくと言った手前、足を引っ張るわけには行かない。
俺はよし、と気合を入れて旅支度を再開させる。
でも、何を用意すればいいか分からない。
服は二着だけ持って、携帯（たぶん使えないが）と軽い食料は行く前に持って行けばいいか。
とすると、特にない。
身一つだけで異世界に飛ばされる小説の主人公よりはましなんだから喜ぶべきか。
俺は早々に準備を終えてしまいやることがなくなった。
前準備はもうお終い。
後は魔法の使い方をマナにでも教わりたいがマナはゲームに夢中だ。
とても聞ける空気ではない。
よく考えたら、異世界召喚の魔法についても詳しいことを聞いていなかった。
あれは誰でも使える魔法なのか？
ただ、盗賊の様子をみるかぎりマナに無理やりついてきて状況を理解できていなかったようだ。
つまり、マナしか知らない魔法なのか？
マナは、一体何者なんだ？
向こうの世界に行ったら世界を脅かす魔王だとか言われたらどうしよう。
でも、異世界に行く魔法を知っているなんて只者ではないことは分かる。

だが、聞いて『貴様。われの秘密を知ってしまったな。くけけけけ』とか言われても嫌なので聞くことも出来ない。
そのマナは先程ゲームをクリアして寝たところだ。
さすがに今日は徹夜はしなかったな。
俺も早く寝ないと慣れないところに行くのだ、体力がもたない。
俺は思いっきり目を閉じるが、眠気は襲ってこない。
……うきうき気分で結局その日はよく寝れなかった。

☆

朝。
別に早く起きていかねばならないなんてことはないが俺は目が覚めた。
ばっちり寝不足だ。
分かりやすいくらいに目の下に隈ができており、俺はそれを消すようにこすった。
多少目がぱっちりしたがそれでも眠いので顔を洗う。
一応向こうでの食事がどういったものかは知らないし、町、村で食べたりできるとは思えないので、おにぎりでも作ろうとキッチンに向かう。
キッチンからはリビングが見渡せ、マナがソファの上で布団をかけて寝ていた。
女の子をソファに寝かすのはどうかと思ったが、マナが「ここが寝心地がいい」と言う物だからそこに収まってしまっている。
俺は早々に弁当を作り、ついでにマナの分も作っておく。
そんなことをしていると時間も大分経ってきて日が出てきた。
「これが最後の朝日か……」

綺麗に上っていく朝日は俺の門出を祝っているかのようだ。
絢爛（けんらん）に輝く朝日は窓ガラスに反射して虹のようなものを映し出す。
美しいその光にしばらく見惚れていると。

「んあっ……」

喘いだような声を出しながら、マナが起き上がる。

「ふにゅふにゅ。まだ、レベルあげないと……」

そしてばたっと横になる。
寝言か……。
せっかく人が綺麗な光景に感動しているのになんでこいつはぶち壊すような真似をするんだ。
マナの顔に落書きでもしてやろうかと思ったが、やめた。
変わりにマナが異世界からやってきたときに着ていたエロティックな服を取ってきて、マナの横に置いておく。
どうせ異世界に戻るときに着るのだろうからな。
しばらくマナの寝顔をじーと見る。
初めは気分で見ていたのだが、知らぬうちにずっと見つめていた。
か、可愛い。
幸せそうに目をきゅっとしめ、ときどき口をふみゅふみゅと動かす姿は抱きしめたくなるほどに可愛い。
鼻に入ってくる、マナの香り。
俺のシャンプーと同じはずなのに俺とは比べ物にならないくらい、いい匂いがする。
俺のジャージを着ているのにそれがドレスか何かに見違えるほどに美しい。
俺はロリコンだ。だが、これも悪くない。

これ以上見ていると本当に手を出してしまいそうなので、顔を振るようにして視線を外す。

それでもリビングに充満するマナのいい匂いが変な気持ちにさせるので、俺は換気をかねてリビングを目一杯掃除して時間を潰した。

16　モンスター

「では、行くか！」

マナが元気よく腕を組んで叫んだ。
腕を組んだことにより、強調された胸を俺は食い入るように見る。
圧倒的な質感、桃などではとても太刀打ちできないメロンのような大きさだ。
マナは基本裸を見られても恥ずかしがらない。
男というものを意識していない。
だから、こんなぶしつけな視線をぶつけることができるのだ。
マナは何かを呟き始めた。
おそらく異世界への呪文なのだろうが、日本語ではない。
この魔法特有の詠唱があるのだろう。
俺は床に置いてあった鞄を肩に担ぐ。
戦いがいつ起きてもいいように荷物はほとんどないので重くはない。
この鞄だってすぐに使わなくなるかもしれないので、なるべくいらない物をチョイスした。
マナが三十秒ほど呟いたあと、黒い渦が出現した。
黒い渦をよく観察すると、今までには感じなかった恐怖があった。
じっくりと見たのは初めてだった。
空間を飲み込むような黒い渦は、地獄への招待状のようにも見える。
俺が初めて異世界にいったとき、送り返されたとき、マナがやってきたときに見たものだが今は異質なものに見えた。

「それでは行くが、セーブはしたか？」

「マナ、ここは現実だ。いつまでゲームの世界にトリップしてるんだ」

ここ一週間ゲーム、寝る、ゲーム、ゲームといった生活をしていたマナだ。

頭のほうが多少おかしくなっている。

こんなんで異世界に適応できるのか？

「冗談だ。それより、先に言っておくことがあるが……」

マナはそこでためたので、「なんだよ」と俺は促す。

「本当に危険な旅だ。夜寝るのも安全な場所などない。村の外――フィールドを歩いていたらいつ敵が襲ってくるか分からない。こちらの世界のように平和ではない。殺人、強盗、それが身近に起こるような世界だ。自分から殺せとは言わないが身を守るために他人を殺すことができなければすぐに潰れてしまう。それでも、本当についてくるのか？」

マナはしっかりと俺の両目を見てくる。

顔が近く、マナの香りがするが今はそれを邪な気持ちでは感じてはいられない。

誰かを――殺す。

俺が一生懸命忘れようとしていたことだ。

できる……とは思えない。

でもやらねばらないときが必ず来る。そこまでしてついていく理由が、俺にはあるのか？

八割が自分の欲を満たすため、残りがマナに言った気持ちを叶えるためだ。

「大丈夫だ。この渦に飛び込めばいいのか？」
考え込んでしまえば決心が揺らぎそうだったので、
「ああ、手を繋いでいくぞ」
マナは俺の手を握ってくる。
初めてあったときと同じく柔らかくはない。
俺が見ていないところでしっかり剣は振っていたようだ。
この硬さは俺には心地よく、安心した気持ちにさせてくれる。
俺たちは二人並んで、一緒に一歩踏み出した。
黒い渦は洞窟のようにただあるだけ。
異世界。ここから俺の異世界の旅が始まるのか。
今回は自分の意思があるからか、渦に入ってもしっかりと意識があった。
一、二歩進んだ瞬間、暗かった視界がクリアになっていき、光が俺に注いだ。
異世界についたようだ。
遠くまで見通せる景色。
モンスターと思しき雄たけびのような声が聞こえる。
耳を澄ませば、滝の流れるような音もする。
遠くまで見渡せる景色のなかに、草がない土が見えている道がある。
そこには何人かの人が馬車を引きつれて歩いている。
旅の人のようだ。
異世界だな。
俺のイメージ通り、しいて言えば空を見上げてもドラゴンがいない点は悲しかった。
「では、まずは私の鞄を見つけよう」

「はっ？」

「私は盗賊から逃げている最中に鞄を落としてしまったんだ」

「じゃあ、盗賊に持ってかれただろ」

「いや、向こうに滝があるのは見えるか？」

マナは俺から手を離して、指を向ける。

手が離れた瞬間、俺の心に残念と思う気持ちが生まれたが無視する。

向けた方向へ顔を動かすと、確かにあった。

初めに聞いた滝の音はこれだったのだろう。

大きくはないが、小さくもない普通の滝だ。

「滝には落としていないが、その付近に落としてしまったからな」

「つまり盗賊には見つかっていないと」

「そうだ」

なら、いいか。

マナの誘導にしたがい、危険な滝を下りていく。

水しぶきがかかるほどに近い。

滝の左右にある岩壁を下りていくなんて危険すぎるが、マナが余裕で下りていくんだ。

マナよりも身体能力の高い俺も余裕で下りていった。

岩壁には片足が乗れるくらいのでっぱりもあったしな。

一番下まで行き、探すとすぐに見つかる。

大した大きさではない木に引っかかっていたのでジャンプして取る。
鞄をマナに投げ渡した。
「ありがとな。よし、地図、地図っと」
マナは鞄の中を開け、紙を取り出した。
中々大きいものだ。両手で持ってマナは「むう」と唸った。
紙はこの世界の地図だ。
マナは現在地がどこか探している。
地図を見ると、目立つ大陸が六個あることに気づく。
マナが指差してどこに向かうか考えている辺りから推察すると、今俺がいる大陸は地図の右端にある大陸――横に細長い――のようだ。
どの大陸も似たような大きさで、形以外見分けがつかない。
ただ地図の中心にある大陸は他のものと比べ小さいので分かりやすい。
「よし、北に向かおう」
マナは地図を丸めてしまおうとするが、うまくいかない。
鞄と折りたたまれた地図の大きさはほとんど変わらない。
呆れたように見ていたが、ふと唸るような声が聞こえ身構える。
モンスターの……威圧する声だ。
俺の警戒に気づいたのか、敵さんは姿を見せた。
狼のような獣が三体いた。
全体的にオレンジに近い肌をした獣で口からは威嚇するような声をあげ、涎が垂れている。
腹をすかしているのだろう。
どうみても友好的には見えない。

「マナッ」

俺がわずかに緊張した声で呼ぶと、

「むぅ、地図が入らん」

全く警戒していないぞ！

やはり日本で生活してボケたか、と俺が本気で心配しているとマナはさらに続ける。

「そこにいるモンスター――ウルフというのだがお前に任せる。この先、モンスターを殺すときもたくさんあるし、慣れておいて貰わないとな」

意外としっかりと考えていたので先程の言葉は取り消そう。

「……かてっかなぁ」

「なんなら剣を貸そうか？　ウルフはこの世界でも最下層のモンスターだ。ゲームで言ったらチュートリアルに出てきてもおかしくないレベルのモンスターだ」

マナの口からゲームという言葉が出てきて違和感を感じなくなったのは言いことなのだろうか……？

まあ、分かりやすかったのでよしとしよう。

「剣はいらん。俺は拳で戦うからな」

「そうか」

よし、やるか。
俺は両手を一度叩き、ウルフに向き合う。
三体のウルフはじりじりと俺に歩むよって来る。
距離はまだある。
全員が距離を取っている所を見ると囲んで俺を倒そうという魂胆がまるわかりだ。
距離にして三メートルほどだが今の俺なら一度踏み切れば攻撃範囲だ。
俺は地に穴が開かんばかりに足に力を入れて、一番近いウルフまで跳ぶ。
俺は弾丸のようなスピードを拳に加えウルフに叩き込む。
剛毛な、手に刺さりそうな毛を感じてちくっとしたが痛くはない。
他の一体が「ガウッ！」と唸って襲ってくるが、足をあげてカウンター気味に蹴っただけで吹き飛ぶ。
最後の一体にはその足を回し蹴りの要領で叩き込んでやる。
三体は瞬く間に動かなくなった。
死体が残るが、心に負の感情は生まれない。
次の瞬間には死体が粒子のようなものになりウルフが消え、代わりに何かが残っていた。

「なんだ、これは？」

拾い上げてみると先程のちくが再来する。
ウルフの毛のようだ。

「見事な戦いだったな。かなり動けるようで助かったぞ」

マナが腰に鞄をつけた状態でやってきた。
地図はしまえたようだ。

「死んだウルフは粒子になったと思ったらさっき消えたぞ。ここになんか残ってるし……説明をしてくれ」

「じゃあ、説明してやろう。まず、ウルフは死んで世界に戻っていった。粒子は魔力だ。そこに残っているのはアイテムだ」

ゲームとかではモンスターを倒したらアイテムが残るが……現実でも残るのか？

なんとも優しい設定だな。

「じゃあ、それぞれ落としてるものが違うのはなぜだ？」

ウルフがいた場所には毛と皮が残っている。

皮のほうも拾ったがどちらにも血などはついていない。

毛のほうは油のようなものがついていてべとべとだが。

「落し物について詳しく説明したほうがいいか……」

マナはそれからアイテムを拾って予めもっていた箱に詰め込みながら説明をしてくれた。

まとめると、モンスターの体は大部分が魔力を帯びている。

だから死んだときに粒子――魔力になり、大気にばらまかれる。

ウルフの落としたアイテムは、魔力を帯びていない部分が残った結果らしい。

魔力で出来ていない部分は粒子になることはできないので残る。

同じモンスターでも同じ部分が残らないのは魔力を帯びていない部分が違うからということだ。

「それでは、上に戻って道なりに進んでいくか」

俺の考えがまとまったのを理解したのか言った。
さて、どうするか。
マナはさきに崖をジャンプで登って行っている。
僅かな足場をジャンプしていくマナは器用だな。
俺もマナが通った道を進んでいくが……マナのパンティー――異世界にも下着はあるようだ――がふわっと風の影響を受け丸見えなのだ。
水辺の近くは風の吹く量が多く、パンチラではなくパンモロだった。
おかげで足場に注意しなきゃいけないのについつい上を向いてしまう。
落ちたらマナのせいだな。
でも……眼福だぁ。
俺はマナのパンティーをメモリーに焼き付けながら崖を登っていった。
無事に登ることはできた。

17　ベア

最初に馬車を見かけた道まで移動してあとは道なりに進む。
草がない土の道はそれを伝っていくだけで、どこかの村、町につけるらしい。
都市のほうにいくと道も整備されているとマナに教えてもらった。

「先に言っておくが、私は異世界召喚により魔力がほとんどない。戦闘は接近戦しかできないからな」

来る前に言ってくれればいいものを。

「なら俺が魔法の援護をしようか？」

「まあ、邪魔にならないように気をつけてくれ」

軽い調子で会話をしていく。
俺は異世界の景色が気になり、右に左にきょろきょろ視線を動かしていた。
すごいな。
遠くまで見渡せるのでちょっと視力に力を集中させてみる。
離れた場所ではモンスターもちらほら窺える。
どれもこちらは見向きもしていない。
さっき近くを通ったウルフはこちらに襲い掛かることはなく、素通りだった。
マナに聞くと、モンスターは凶暴なのもいるが比較的に温厚だそうだ。
自分が空腹、縄張りをとられたなどの要因がないかぎり誰かを襲うことはないそうだ。

無駄に襲って怪我したくないのだろう。
うーん、賢いな。
中には全く敵愾心（てきがいしん）のないモンスターもいて、今俺の頭の上にはバルーンラビットという、ウサギを風船のようにしたモンスターが乗っている。
このウサギは初めから人を襲うことがなく、あちこちで飼われているのだ（マナが言っていた）。
理由は見た目の愛くるしさもあるが、なんと回復魔法を使えるという利点があるのだ。
回復魔法を使える人材が少ないことからバルーンラビットは人気が高い。
俺の頭に乗ってる奴も俺が怪我したら治してくれるはずだ。

「むっ……？」

マナが腰に差してある剣に手を宛がい、足を止める。
足音が消え、辺りは静かになったが……地響きのようなものが足の裏から伝わってくる。
緊張したその空気に俺もごくりと唾を飲み込む。
頭にいたウサギはぷくーとふくらみ空へと逃げていった。
危険を感知したようだ。というか逃げるのが早い。
俺が怪我しても治してくれないのか。

「マナ、何かいんのか？」

「……ゴウ、跳ぶぞっ！」

マナは一足先に跳び、俺はマナとは逆方向にバックステップする。
すると、俺とマナがいた場所に黒くでかい腕が埋まっていた。
俺は腕から辿るように視線を向けて、その巨体に気圧され後ずさ

る。
見た目は熊だが、大きすぎる。
大雑把だが五メートルほどはある。
鉄柱のように大きな腕に、大きな足。
熊は大きな、血で染まったかのような赤い瞳をこちらに向ける。
これほどの大きな生命体になぜ気づけなかったのか。
攻撃は後ろからされたということは、気配を消していたのか。
とにかくターゲットにされたようだ。
瞳が俺を射抜き、次のモーションへと移行しそうだ。
分断されてしまったせいで、作戦がたてにくい。
まずは合流からだな、と思っていると熊が勢いよく息を吸い込んだ。

「ゴウ！　耳を押さえろッ！！」

焦ったような叫び声に俺は慌てて耳を押さえる。
ついで、耳を劈く音が手越しに伝わる。
音楽を聴くときにイヤホンをつけて大音量で音を聞いたことはないだろうか。
または友達が悪戯で音量をマックスまであげたことはないだろうか。
俺はうざ男にやられて頭にチョップを食らわしたことがある。
あれよりもうるさい音が俺の両耳を襲い、さらに声が生み出す衝撃波で俺の体を吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

俺の方に地響きを立てながら迫ってくるので慌てて立ち上がり、襲い掛かる手を避ける。
声の攻撃は相手に恐怖を与えるのか、俺の体は震えていた。

押さえようとしても押さえきれない、本能に対して攻撃したような一撃だった。
攻撃範囲が広く、微かに腕にかすりそうになる。
それでも何とか体を転がして、避ける。
あの太い腕から繰り出される技はかすっただけで致命傷になりかねないな。
体の自由を奪われるような効果は一時的なものらしく、攻撃を避けたときには治っていた。
俺は熊を追い抜き、マナに合流する。

「ゴウ、無事か！」

俺は頷き、マナの体を見る。
マナはどこも怪我をしている様子はない。
安堵の息を漏らす。

「この熊は強いのか？」

「熊ではないベアだ」

「そこはどうでもいい」

「ベアは気性が荒いが、恐れるほどではない。ただ、ベアはここら辺には住んでいないはずだ。岩山とかにいるはずなんだ」

岩山、か
先程訪れた滝は岩山というには程遠い。
だとしたらどこからか現れたのだろうか。
眼を凝らして周囲を見回すがそれらしきものはない。
かなり遠くからやってきたのだろう。

他のモンスターにでも縄張りを取られたのだろう。
「腹でもすかしてんだろ。それより、作戦は？」
「私が接近戦をやる。ゴウには魔法の援護を頼む」
「……逆じゃなくていいのか？」
言っちゃ悪いがどう考えても一撃は俺のほうがある。
マナも魔力はあまりないと言っていたが多少はあるはずだ。
「私は一人で旅をしてきたんだぞ？　モンスターの癖なども分かっているつもりだ」
確かにさっきの熊の攻撃は俺には予測できていなかった。
追撃を避けられたのは身体能力が高かったおかげだ。
ここは任せよう。
俺はマナに教えてもらった魔法の基礎を思い出しながら、詠唱を始める。
「火の精霊よ。炎の矢となり敵を貫け。フレイムアロー！」
俺の足場に赤い魔方陣――いまさらに気づいたが魔法によって色が決まっているらしい――が浮き上がり俺の正面から炎の矢が熊に向かって飛んでいく。
炎の矢は意志で操作できるようだ。
真っ直ぐにさらに加速するように思いを込めて、先に進んでいるマナを追い抜かし熊にヒットする。
出現した三発はすべて熊に突き刺さるが……熊にダメージは見られない。

魔法の威力が弱いのか、熊が魔法に打たれ強いのかは分からないがどっちにしろさらに魔法を打つべきだろう。
今の攻撃では挑発しただけになっている。
精霊に呼びかけたが威力の向上に効果があったかも分からない。
でも、一応呼びかけよう。

「風の精霊よ、集え。風よ刃となりて、敵を刈り取れ。ウインドカット！」

今度は足場が緑色になる。
魔法の発動する場所――熊の腕の部分をイメージして、発動させる。
さっと、熊の毛皮を刈り取りその部分の肌が見える。
先程とは比べ物にならない威力だ。

「よくやったっ！」

マナは俺に激励にも近い声をあげると、己の剣を先程俺がむき出しにした肌へと斬り付ける。
マナの剣は綺麗な半円を描き、熊のむき出しになった肌を斬った。
熊は痛みを堪えるように叫び、傷を負っていない左腕をマナへと振る。
マナは……問題ないようだ。
バック転をお見舞いし、避けながらさらに斬っていた。
俺はもう一度魔法を詠唱しようとして、考える。
炎ではまったくダメージはなかったが、風では表面に見えるほどに威力があった。
あいつは風に弱いのか？
俺はそう考え、熊の体全身を覆うような魔法をイメージする。
さらにそこからよりイメージを強固なものにするために詠唱を開

始する。

「風の精霊よ集え。集いし風よ、我が前に具現し、目の前で暴れる敵を切り裂け。マナ、離れろっ！　ブラストレンジ！」

俺が手を振り下ろすのとマナが大きく後ろに跳ぶのは同じタイミングだ。

俺がイメージした魔法は、ある一定の範囲を無数の風が切り刻むという魔法だ。

俺の想像通りに魔法は発動して一定の範囲――熊の真下に術式が現れ、その上に乗っている熊を切り続ける。

全身を切り刻まれた熊は、動くことなく倒れる。

「……君は、すごいな」

「ありがとよ」

マナの驚く表情から考えるに先程のレベルの魔法は中々すごいようだ。

「ま、まあ、私も魔力があればあの程度は出来るけどなっ！」

……負けず嫌いらしい。

俺は「マナはすごいもんな」と大人なあしらい方であしらい熊に近づく。

強い、相手だったな。

俺は全身傷だらけの熊を目にすると、多少心にちくりと痛みが走るが人ではない分全然ましだ。

熊は、最後に身震いさせそれが合図だったのかウルフ同様粒子になり、何かを落とした。

「皮か？」

俺は掴みあげる。

それと剛毛も残っている。

「貸してみろ」

マナに渡すとマナはポケットから小さい箱を取り出し入れる。

……ちょっとまて、何それ。

「その箱なに？」

「これか？　これはアイテムボックスといってな。空間を捻じ曲げる魔法がかかっていて中にいくらでも持ち物を入れられるんだ。こちらの世界で最近発明された物で冒険者の間で人気ナンバーワンだったので買ったんだ」

「用はアイテムを大量に入れられる箱というわけね」

今までちゃんと観察していなかったがあそこに盗賊の武器とかも入っているはずだ。

マナはこくりと頷き、「ウルフの毛皮」と言って箱から取り出す。

「すごいだろ？」

自信満々に胸を張るが、お前が開発者じゃないだろ。

思ったが、「すごいすごい」と適当にあわしておいた。

とりあえず、バトルは終了したな。

18　ノッサンド村

それから何度かモンスターに襲われたが無事に倒した。
幸いにも盗賊の襲撃はなく、ほっと胸を撫で下ろしている。
時間にして、半日近くを歩いている。

「村だぞ」

俺は普段はこれほど多くの距離を歩くことなどなかったので疲れていた。
太陽の日差しは暑くはないが、それでもこう長い時間浴びていると確実に体を蝕んでいく。
マナの声は俺を疲労の渦から引っ張り出してくれた。
顔をあげると大きくはないが、しっかりとした村のようだ。
俺は早く休みたいとマナよりも先に一歩踏み込むと、

「この村にいると呪われちまうっ！！」

中から全身を初心者冒険者のようなちゃちい装備で固めた三人組が走って逃げだしていく。
わざわざ日没までに村につけたのにもかかわらず出て行くなんて。
もうすぐ日が落ちるような時間だ。
夜になればモンスターたちの奇襲に気づけずに殺される可能性があるので、あまり夜に出歩くのはよくないらしいが、俺の知ったことではないか。

「の、呪いだと……？」

マナがただでさえ白い顔をさらに白くして、唇を震わしている。

マナが呪いと呟きながらビビッている姿を見て、ピカーンときた。
ははーん。
彼女は呪いとか幽霊とか駄目なタイプか。
こうなったらラッキーなチャンスを待つしかねぇ！
驚いてキャーとか言って俺に抱きつくチャンスをな。
すっかり元気になった俺は、さらに一歩踏み込むと、

「俺たちもごめんだー！」

さっきの三人組とは違う、馬車を使って移動している人々も村から出て行った。
危うく馬車に跳ね飛ばされそうになったが今の俺はテンションが高いので許してやろう。
……あいつら、まじで大丈夫だろうか。
呪いってなんだろう。
そういう迷信のようなものを信じない俺は呪いなど気にせずに中を歩いていく。
マナも恐る恐るといった感じで歩いていく。
俺が時々盗み見るとビクビクと怖そうにしているが、俺の視線に気づくと強気な態度をとるのだから可愛い。

「おい、アンタ」

俺は少し進んだところにいた三十歳程度の男に話しかける。
男はニコッと爽やかな笑みを浮かべて、近くにあった木を掴んで土の地面に文字を書いていく。

『ようこそ、ノッサンド村へ』

いや、ゲームみたいな受け答えはありがたいがなぜに喋らないん

だ？
男の人以外にも人はいるがみんなが土に文字を書いて会話をしている。
な、なんの宗教だ？
こちらの世界に宗教などあるのか知らないが、恐ろしい。
確かに呪われそうだ。
「なんで、喋らないんだ？」
俺が率直に尋ねると、男は悲しそうに目を伏せ、
『喋れないんです』
とさっき書いた場所を消して書いた。
どうやら外的要因で喋れないようだ。
ここまで聞いたらなんだか気になってしまったので、さらに追求する。
「理由は？」
『詳しく聞きたいのであれば、村長のところへ行ってください。案内しましょうか？』
ゲームで言ったらはいかいいえが出るのだろうな。
「はい」
「い、行くのか？　呪われるかもしれないぞ？」
マナよ。さっきまでは強がる程度は出来ていたのに、今では俺の

服の裾を引っ張るほどに弱弱しいな。
可愛いからいいけどな。
「呪いなんてありえ――」
ないと言おうとしたがここは異世界だ。
呪いだってないとはかぎらない。
「――なくはないな、うん」
余計にマナを不安がらせてしまった。
無意識のうちにこうなることを狙っていたのかもしれない。
自分の欲に感謝しよう。
手を掴んできたので俺としては最高のシチュエーションになっている。
男に案内してもらい村長の家へ。
村長の家は他よりもでかい。
村自体大きくはないが、村長の家は二階建てでその分だけ大きかった。
他の家はどこも二階はない。
こんこんと男がドアをノックすると、中から杖をもったおじいさんが出てきた。
『お客です。呪いについての話が聞きたいそうです』
『なに？　そうか、ならお前は下がりなさい。後は私が話をしよう』
俺は二人の会話――筆談を見た。
「で、あんたが村長か。なるほど、村長みたいな風貌だ」

サンタクロース並みにひげが長く、杖をもっている。
俺のイメージを抜粋したようだ。

『あなたがたは旅のものかな？』

「ああ。そうだけど、なんだかこの村が変なんで立ち寄った」

なんで、俺がこんなにも多弁に話さなければならないんだ。
こっちの世界が故郷のマナはなぜ口から魂だして遊んでるんだ。
って魂！？
こいつ現実逃避を始めやがったな。
まあ、いてもうるさいだけなのでこのままにしておくか。
村長の目がなければ胸でも揉んでやろうかと思っていた心の声を押しとどめる。

「それで、呪いってなんだ？」

『それが、分からないのです。ある日いきなり、声が出なくなってまるでサイレントの魔法に罹った様に』

「サイレント？」

思わず聞くと、村長は知らないのか？　と言った目で見てくる。
サイレント……静かなって意味だよな。
状況的に推察するに、声が出なくなる魔法って事か。
何のために？

「確か声が出なくなる魔法だな」

俺はさも知っている風を装い、あごに手をやってうんうん頷く。
『はい。ですが、サイレントの魔法だとするならこんな長期間も罹っているわけがないのです。長くても一日で治りますし』
「今何日声が出ないんだ？」
『ちょうど二週間です』
に、二週間。
俺は二週間も喋れなかったら頭を壁にぶつけるほどに狂うな。
「この村では誰も喋れないのか？」
周囲を見回すが誰一人として喋ってない。
家畜にいる豚のような生き物――見た目は豚だが鼻が異常に長い――や、バルーンラビットでさえ喋っていない。
『一人だけいます。……私の家にいるクーテという子です。ただ、彼女の両親は一ヶ月ほどまえに死んでいて、今は人に会いたくないと避けているので……』
いるのかよっ！　とツッコミたくなったが、なにやら複雑な子だな。
「……あんたの筆談を通すよりも話はしやすいかもな。それにその子だけ呪いから逃れているというのも妙だ。会ってもいいか？」

村長は、悩んだ後瞳を輝かせる。
男の瞳が輝いても全然嬉しくないのでばれない程度に視線を外す。
『つまり、呪いを解決してくれるのですか！！』
村長が木の杖を投げ捨て手を握ってくる。
ふにゃふにゃとして、なんだかきもちわるい。
あと気になるほどではないが近寄られると臭い。風呂はこの村にはないのかもしれない。
苦笑しながら俺は頷く。
「まて、私を置いて話を進めるなっ！」
マナが俺の肩を掴んで、力で無理やり顔を向けさせる。
ずっと魂抜けてればいいのに。
「もしも呪われたらどうするんだっ！」
「呪われねーだろ。話聞いてたか？　サイレントという魔法に現象が似てんだよ」
「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！」
「駄々っ子かこんちくしょー！」
「私は宿に泊って明日にはこの村を出発するからなっ」
「涙目で言いやがって可愛いなーおい！」

「意味分からん。私は宿を取ってくるからな！」

マナはそう言って、近くの宿屋へと突っ走ってしまった。

店の看板に『宿屋』と日本語で書かれているのはなんともシュールだ。

「村長、というわけで俺一人なんですけど……その前に窺いたいことがあるんですけど……」

『？』

「俺金ないんで、呪いを解く代わりに住む場所と食をタダで提供してくれませんか？」

というか、俺にただで人助けをするほど余裕はない。

元々、次の村に行った時に宿に泊れる程度の金は稼いでおこうと思ったから今回の呪いの解決に手を貸そうと決意した。

『……構いません』

今度は村長が苦笑だ。

それにしてもこの人優しいな。

見ず知らずの人をここまで信用できるなんて……。

またはよほど切羽詰っているか、か。

「私も手伝おうっ」

「マ、マナ？」

さっきお別れだとか言って去って言ったお方が既に戻ってきてい

る。
こいつはこっちに来てから本当に訳が分からなくなっている。
どこに向かっているんだ？　人間的な意味で。
「私も手伝うので、住む場所と食を」
「まさか……」
「うむ、金がないことを忘れていた」
俺は、ついてくる奴を間違えたかもしれない。

19　クーテ・ロベリトル

「クーテさんに会ってきます」

俺は目的であったことを告げると村長は苦い顔をしていたが、特に止めようとはしない。

マナは……金を作るために盗賊の武器を売りに行った。

ウルフの素材などは都市部のほうが高く売れるのでここでは売らないらしい。

場所によって価値が違うのか。

ゲームなどでは大抵値段は均一だからそこまで考えたことがないな。

意外なところで異世界について知る。

俺は村長宅に入り、クーテがいるという二階へ。

クーテという名前から女の子の名前だと予想だてている俺は若干妄想気味に探していると。

――ウルフがいた。

全体的な色はオレンジ気味の村の外でみたものと大して変わらない。

変わるとしたら発している気配というかなんというか。

歴戦の戦士のような風格のウルフが陣取っている部屋のドアにはクーテと木彫りされていた。

「ガゥッ！」

ただ近づけない。

なぜこんなところにモンスターがいるのか疑問だな。

というかこいつも声出ているじゃないか。

考えられるとしたらクーテの……ペット？

ペットとするには凶暴すぎる。こいつを従えているクーテは一体どれだけ怖いのだろうか。
先程までの甘い妄想は一瞬で消され、魔王のような存在が浮かび上がる。
中に入るにはこれを突っ切るしかない。
俺が一歩踏み込むと、鋭いタックルを食らわしてきた。
ウルフに馬乗りになられ、何度か吼えてこちらに来るなと睨んでくる。
馬乗りになったのが女子だったらいいものを。
モンスターなどに馬乗りになられても嬉しさなどこみ上げてこず、むしろ怒りで殴ってやりたい。

「やめて、ウー！」

初めて、この村で女の子の声を聞いた気がする。
発信源を探してみると、クーテの部屋のドアが開いている。
色素の薄い髪によりわずかに隠された髪したにはおっとりと下がった目尻。
目尻からわかるように彼女は随分と温厚そうな正確だ。
白い肌は不健康ということはなく、可憐な少女にあっていた。
大きな瞳は新緑を彷彿させるようなエメラルド色をしている。
華奢な体は線が細く、引っ込む所は引っ込んでいるが出るところも出ていない未熟な体。
小学生に間違われるほどに小さい体。ロ、ロリだ。
目の前に、追い求めていたロリロリな女の子が突然現れて俺の頭の中は真っ白になる。
先程作られた怖い人物像は一瞬で砕け散り、目の前の女の子とデートする姿までも妄想する。
「ウー、人に攻撃しちゃいけないです。あの、その……け、怪我は

あり……ませんか……？」

よそよそしい言葉遣いをされ、ようやく現実世界に戻る。
可愛すぎて、抱きしめたい。
ただ、そこにいるだけで人を魅了する彼女の可愛さ。
俺はそんな衝動を直隠（ひたかく）しにし、深呼吸してクーテの前に座り込む。

「怪我はないよ。それより、君に聞きたいことがあるんだけど」

努めて丁寧な口調で話す。
彼女は随分と人見知りしそうなのでしっかり目線を合わせる。

「聞き……たいことですか……？」

女の子は俺の視線にびびりながらも懸命に答えてくれる。
良い子だな。
軽く頭を撫でてやろうかと思ったがまだ早いかと思いとどまる。

「そうだ、何で君だけが声を出せる？　今俺は声が出ない事件を解決しなきゃらないんだ。知ってることがあると教えてほしいんだけど」

「あなたが助けてくれるんですか……！」

急に女の子は俺に抱きついて、上目遣いに見てくる。
縋るような、視線に俺はぽけーと頭の中がお花畑になった。
脳の思考回路をすべてハッキングされて、コントロールを奪い返したと思ったらクーテのデータしかないような状態だ。

「お、おう」

何を助けるのかは分からないが俺は頷き返していた。
こんな可愛い子に頼まれて断れるわけがない。
「駄目……ですか？」とか上目遣いでされたいな。

「そうですか。ではわたしがお話しますね」

「え……？」

「何か……問題でもあるんですか？」

「ないないない。どうぞ」

悲しそうに目を伏せるのは反則だ。
それだけで庇護欲がかきたてられる。

「その前に。わたしはクーテです。クーテ・ロベリトルです。どうぞクーテと呼んでください」

「俺は、ゴウ・ハシブだ。ゴウでいい」

「分かりました。ゴーさんは呪い事件の原因がサイレントの魔法だと知っていますか？」

「ああ、村長がそんな話をしてたな」

それにしてもクーテのゴウの呼び方が引っかかるな。
英語のＧｏと言い方が似ているような……気のせいか。

「たぶん、犯人はこの国の騎士の人です。わたしの両親はあいつら

に殺されました」

あれ？　瞳を暗い炎がともしているように見えるのは気のせいか？
こっちの話をしては彼女の黒い部分がでてきそうなので呪いの話に戻す。

「……ふーん。で、原因はわかる？」

呪いのだ。

「村の人が騎士に殴られて、それで、それを注意したら。そしたらパパとママを殺したんです。殺した奴らはパパとママの仇です、殺してあげます」

おっと、聞いたのはそっちじゃないんだが。
まさかそっちの話を広げてくるとは思いもよらなかった。
聞き方が悪かったなと反省する。
最後の一言がなんだか物騒だったような気もするがきっと聞き間違いだ！

「呪いの原因がそいつらだという理由は？」

俺はさりげなくクーテの髪を撫でて落ち着かせながら話す。
ふわっとしていて気持ちのいい髪で匂いもいい。
この子は毎日風呂にでも入っているのだろう。

「変な機械を持ってたんです。たぶんあの機械が、原因だと思います」

「機械？」

ファンタジーな世界には似合わないな。

「詳しく分かんないんですけど……村の人も知ってると思います」

「よし、じゃあその騎士をとっちめれば解決ってことか」

相手は随分と横暴な性格のようだが、盗賊とは違い多少は話が出来るはずだ。

じゃなきゃ騎士なんて職業に就けるはずがない。

だと、願いたい……。

「ですが、場所が分からないです……」

しょぼんとすると、ウルフがそれを慰めるように頬を舐めていた。

こちらに顔を向けて「何か言いやがれ」と訴えてくる。

お、俺が？

今にも泣きそうな女の子にかける言葉なんて見つからないぞ。

泣いている姿を見ると「俺がなんとかしないと」と考えるようになる。

「よしよし、それは俺と、俺の仲間で一緒に見つければいいんだよ。明日一緒に村で聞き込みをしような」

「……村の人には会いたくないです」

俺の頭を撫でるという初歩的な技は成功したようだが如何せんその先がまずかったようだ。

この子はあまり村には馴染めていないのかもしれない。

ウルフが「まじで空気よめねーな」と言っていそうな顔で見てく

る。
しめてやろうか。
ふっと透かしたため息を漏らして、また頬をぺろぺろ舐めていた。
「おい！　ゴウ、ご飯だぞっ！」
階下からマナが大声をあげる。
どうやら、武器の売却が終了して戻ってきたようだ。
「下に行くぞ」
「嫌です！」
「わがまま言うな」
俺はむりやり抱えあげてクーテの部屋を後にした。
腕の中で暴れるクーテ……萌えぇ。

20　発見

嫌がるクーテを無理やり抱きかかえて、下りる。
ふにふにとしたおなかが気持ちいい。
高級クッションとかに分類されてもおかしくない。

『クーテ』

村長が紙に文字を書いている。
こちらの世界にも紙はあるんだな。
クーテはバツが悪そうに頭を下げて、「こんばんわ」と言った。
俺の家よりも大きな机に並べられた数々の料理。
おもてなしだ。
あと、この世界の主食は米らしいな。
正式名称は知らないが米のようなものが茶碗によそられている。
ちょいちょい日本が出てくるから、軽いホームシックになりそうだ。
ますますこの世界には何かあるんじゃないかと疑いたくなるな。
地球に――もっといえば日本に似すぎだ。
夕飯は会話もなく（というか会話をできるような状況ではない）夜になる。
夜は早く寝るのが基本らしい。だが、火の精霊を入れて明かりを保つランタンのような存在があって、俺とクーテはそれを借りて外に出ていた。
精霊はいるようだな。
マナは「早く寝て魔力を回復させる」と既に就寝済みだ。
クーテが気になる場所につれていくといってきたので俺はこうして外を出歩いているのだ。
もちろん、クーテのペットのウルフもいる。

名前はウーというらしい。

「ここです」

クーテと一緒に村から少し離れた森のような場所に入る。
ここには、モンスターはいないようだ。
クーテに聞くと村の子供たちの遊び場らしい。

「ここです」

俺が特に何もしないのでクーテは再度繰りかえす。
いや、俺は何をすればいいんだよ。
俺はランタンを地面に近づけて明るくさせる。
目立った異変はなく、首を傾げる。
しばらく周囲を見回すと、そこに機械の破片のようなもんがあることに気づいた。

「機械の破片があるな」

「そうなんですか？」

いや、お前がここだって。
クーテは心底不思議そうに覗き込んでいた。

「たぶん、そうだ」

「そうなんですか……この前はここに変な機械があったんです、このくらいの」

クーテは両手を広げて見せる。

愛くるしい姿を見るだけで俺の心が癒されていく。
大きさは約一メートルと言ったところか。
俺は機械の破片を拾い、ポケットにしまう。
これで何かが分かるとは思えないな。

「騎士たちがどこに行ったか分かるか？」

クーテが知らないのは既に聞いていたのだがつい訊ねてしまう。

「それは……分かりません」

しょぼんと頭を下げる。
分かっていたらクーテが一人で突っ走っていそうな気がするな。
頭を撫でて、いると、ウルフが「がるるる」と警戒するように鳴く。
俺に警戒しているのか？　と思ったが違った。
森の近くから二足歩行のドラゴンが現れた。
どこか体が細く見える。

「フーリッシュドラゴン！」

「なんだそりゃ？」

「岩山に住んでいるようなドラゴンなんです。ここにはそもそもモンスターは寄り付きませんし……ドラゴンの住む場所にしては餌がないんです」

「強いのか？」

「別に強くはありません。ドラゴンといっても底辺のドラゴンで、

ウルフよりも少し強いくらいですよ」

微妙だな。

それを聞くとドラゴン自体が弱そうな感じに思えるが、こいつが例外的に弱いのと願いたい。

もしもドラゴンが弱い存在だとなれば俺の中のドラゴン像が壊れちまう。

「さらに翼があるにもかかわらず空を飛べないんです」

「お、愚かなドラゴンだな」

俺は苦笑しながら向き合う。

ドラゴンはがっ、がっと鳴き、突進してくる。

背丈は俺と同じくらいか。

「クーテ戦えるか？」

「当たり前です！　村一番の魔力を持った天才魔法使いなんですからね！」

ちょっとだけ胸を張っているように見える。

この子は、多少知り合った人には結構強気なんだな。

というか自分で天才とか言うな。

「俺があいつを足止めするから、その間に特大の魔法の準備をしてくれ」

「分かりました」

俺はドラゴンとぶつかる。
パワーでは、俺の方が上のようだな。
俺は押し返し、態勢を崩したドラゴンの腹を蹴る。
これならクーテの力を借りる必要はないかもしれない。
倒れたドラゴンは、ドラゴンの威厳を見せんばかりに倒れながらも炎弾を吐き出す。
避けたら、クーテに当たってしまう。
近づく熱は高くはない。
夏の熱風程度の低音なので殴って粉砕できるかもしれない。
俺は他にいい受けかたはないか考えていると、ウーが飛び出て空中で一回転。
危ないと思っていたがなぜかウーの足場には魔方陣がでている。
ウーが尻尾で斬る様に炎弾にあたると、炎弾は凍りついた。
今のは……魔法か？
でも、接近戦の攻撃に魔法を使えるなんて知らないぞ。
後でマナに詰問だな。

「風と水の精霊より生まれし氷よ。現れて、すべてを飲み込む暴風よ。目の前の敵を氷結の嵐に飲み込んで！　アイストルネード！」

俺はわずかに離れていても感じる温度の低下に身を震わせる。
冬なんかよりも寒いのは風もともにあるからだろう。
現れた嵐に飲み込まれたドラゴンはすぐに体を凍らしていき、完全に凍った瞬間にドラゴンは風によって割れた。
こ、怖いぞ、このロリは。
思っていた『守ってあげた』ような存在ではなく、むしろ俺が守られそうなぐらいに強い。
人は見かけによらないんだな。

「怪我はないですよね？」

「大丈夫だけど、すげーな今の魔法」

一瞬でついた決着にどこか拍子抜けなさを感じながらもクーテに笑いかける。

クーテはにこっと子供らしい笑みで、

「わたしは魔法なら誰にも負けませんもん」

「そうか、頼むから俺にはぶつけないでくれよ」

戦闘中にうっかりぶつかったらしゃれにならない。

クーテは言葉の意味を理解していないのか首を傾げている。

異世界で、一番の恐怖を感じた。

21　二人の仲

次の日。
地球での時間は七時だが、既に村の人たちは働いている。
モンスターを狩るもの、畑などの世話するもの、お店を開いているものなどいろいろいる。
お店は絶対に儲からないだろうな。
声がでないせいで旅人たちは不気味がり誰も寄っていかないのだから。
俺とマナとクーテの三人は行動を共にしている。
騎士を犯人と決めるには情報が少ないが、騎士が何かを知っているのかもしれないので情報を集めている。
あまり芳しくないが。

「それより、クーテ、ウーはどこに行ったんだ？」

「ウーは村の人の狩りの手伝いです」

村の人はモンスターではなく獣を狩りに言っている。
獣はモンスターと違い全く魔力を持たない存在で、肉を得るには彼らがてっとりばやいそうだ。
村で育てている豚のような生き物も獣らしい。
フィールド――村の外のこと――にいるモンスターも基本は獣をくらって生きているらしい。
獣はすべて草食だから、食物連鎖的にはいい感じになっている。
世界ってのはよくできてるなと感心させられる。

「それにしても情報が少ないな。一ヶ月も経ったせいもあるのかもしれないが」

マナが顎に手をあて、悩む素振りをみせる。
クーテはこそこそと俺の後ろに隠れて服の裾を掴む。

「クーテ、私が怖いか？」

マナは優しい声を出して、手を伸ばす。
クーテはびくっと震えて俺のわき腹に顔を埋める。
顔を見たくないという気持ちがありありとわかる。
マナ、ナイス。
マナは気落ちしているが俺の心はハッピーだった。
こんな可愛い子に頼られるなんて向こうでは考えられなかったな。
異世界最高！

「クーテ、マナは別に怖くないから」

でもフォローもしておかないとこの先、三人で戦闘が行われた場合チームワークが乱れる恐れがある。
クーテは「はい……」と力のない返事をしたが、マナと話すことはしなかった。
難しいなぁ。
そもそも、人見知りの激しい子なんだ。
なんで俺がここまで慕われるのか分からない。
それが分かればマナにも懐くかもな。
情報集めを再開しよう。
近くにいた子供に訊こうとしたら、子供たちは俺たちを見るなり逃げていた。

「なんであいつは逃げたんだ？」

女子二人が原因とは考えにくい。女の顔をみて逃げるような男は男じゃない。
俺の顔が怖かったからだろうか。
確かに仏頂面なのは否定しないがだからって逃げなくてもいいじゃないか。
心に傷を負ったぞ。

「わたしが……いるからだと思います」

「は？」

「わたし、魔力が多くて元々村では仲間はずれだったんです。家族が殺され、さらにサイレントによって村が呪われたから。みんなわたしのことを呪われた子って言うんです」

事件が偶然にもクーテを除いて起きたから、みんなから苛められているのか。
……クーテが、復讐以外でもやる気があったのは汚名返上したからだったのか。
事件を解決すればみんなの向ける視線が恐怖から憧れなどに変わるという思いがあったのか。

「大人たちだって、本当はわたしのことを嫌ってるんです。でも、わたしのことを気遣うのが嬉しくて、だからこそつらいんです」

「だったら、私を頼れ。私は君のせいで呪われているとは思わない」

俺が、何かかっこいい台詞で慰めてやろうかと思っているとマナに先を越される。

「呪われているとかではない。サイレントのような状態異常魔法は相手の魔力を凌駕しなければかからない。つまり術者の魔力が君よりも劣っているから君はかからないんだ。私たちは魔力が多いからこうして無事なんだ」

へぇー、初めて聞いた。

マナは真面目な顔でクーテを見据える。

クーテも目を逸らさないように、しっかりと見詰め合う。

見つめた瞳には涙がうっすらとたまっていた。

マナの慰めの言葉はクーテの心に届いたようだ。

頬もわずかに染まり、今にも泣き出しそうだった。

なんだか、大事な茶化す場面ではないのに背景に百合の絵がでてしまう。

「マナさん……ありがとうです」

クーテが笑みを向ける。

可愛い、横顔しか見ていないが俺の心はノックアウトされかけている。

正面からくらったマナは、ぐわと唸り、

「別に感謝されるようなことは言っていない」

頬をわずかに染めて、照れたのがばれないようにする。

俺はなんだか微笑ましくてついつい口元が上がる。

「じょ、情報を集めるぞ」

マナは先に歩いていき、クーテは「待ってください」とマナの背を追っていく。

距離が縮んだな。
変わりに俺から二人への距離が開いたような気もするな。

22　証拠を探せ

結果報告をさせてもらうと、めぼしい情報が集まることはなかった。
午前の時間を使って、俺たち三人が集めた情報は騎士が持っていた機械を数人が目撃したことと、騎士は四人組みで、そのうちの一人が鎧などを着ていない白衣を着た男がいることだった。
こちらの世界でも白衣があることに驚いたが、白衣を着ている人間は数少なく、国でもトップクラスの科学者だということらしい。
機械は科学技術を用いて作られているようだ。
……ファンタジー世界と言うものがどんどん崩れていくな。
どうせなら今の日本ぐらいまで発展すればもっと俺も過ごしやすいのに。

「午後は昨日行った場所にもう一度向かいましょう」

クーテは、俺とマナの間に入って手を繋いでいる。
右手は、俺と左手はマナと。
俺はお辞儀して感謝して、マナは恥ずかしそうに手を握っていた。
可愛い女の子は苦手なようだ。
なんか、子供みたいだよな。俺とマナの。
やばい、自分で考えて恥ずかしくなってしまった。

「でも、今さら情報はなくないか？」

俺は昨日も見たのだからという意味を含める。

「昨日は場所の案内を目的でしたから、詳しくは見ていませんし、今は明るいです。昨日とは色々違って見えると思います。それにわ

たしはここを調べたことがないんです」

クーテはきっと何かが見つかると元気な様子で喋る。

マナは「昨日？」と首を傾げていた。

「お前がぐうすか寝てるときに行ったんだよ」

「そうか。それで、何か見つかったのか？」

「変な機械の破片がな。……ほら」

「ふむ。よく分からんな」

「今ある物的情報はこれだけだ。クーテはこれを見つけた場所に行きたいらしい」

こくりこくりとクーテは頷く。

「行ってみる価値はあるな」

☆

木々に囲まれるように、だが開けているこの空間には人がいた。

子供の遊び場になるほど安全な場所にモンスターが出るなんて誰も予想もしていなかったはずだ。

一応村長にはここにその旨を伝えておいたからここには誰もいないだろうと思っていたら子供が普通に遊んでいた。

「おい、ガキども。何でここにいるんだ」

危険があるにもかかわらずここに来ている子供たちを説教する。
クーテはマナの後ろに隠れて、子供を見ないようにしている。
俺の後ろに隠れてくれないのがちょっぴり悲しい。

『だって、ここにモンスターなんかでないもん。うそつきの、バケモノの言うことなんか信じるか』

今さらながらこの世界は随分と教育がされているんだな。
子供まで文字が書けるのは珍しいことではないのだろうか。
生意気な所はどこの世界でも変わらないな。

「うそつきってのは俺のことか？」

『そこの、のろわれたやつだ』

クーテを指差し、無遠慮な物言い。
俺はいらっときたので、苛立ちを解消するためにガキの頭へ拳を突き落とす。
加減はしたがごんっと大きな音を出す。
男はその場にうずくまり、泣き出す。
声がでないが涙はでているようだな。
他にもガキはいたが、残りの二人は静かにしょぼんと頭をさげて反省している。
演技なのか、それともこのガキが無理やり連れてきたのかは分からないが反省していると信じてなにも言うまい。

「さっさと村に帰れ。本当にここは危険なんだからな」

釘をさして、子供たちを追っ払うように手を振る。
泣いている子供を無事な二人が引きずっていく。

中々手荒な運び方だ。
泣いている男は荷物のようにずりずりと土を削りながら歩いている。
「さて、捜索を開始するか」
俺たちは三人で分割してそれぞれの管轄に何か証拠がないか探し始めた。

23　ボスベア（前書き）

ザコ戦が多い気がしますが、そこは見逃してください。
八月二十九日（明日）からは学校が始まるので更新もゆっくりめになると思います。
受験もありますし。早いうちにノッサンド村編にきりがつけばいいなと思っています。
更新の目標は一週間に一回程度です。

23　ボスベア

結局、何も見つからず何度かモンスターの襲撃を受けたくらいだ。
クーテ曰くここにモンスターがこんなに来るのは異常らしい。
普段でもモンスターがこの場に来ることは極端に少ない。
それこそ一年に数回あるかないか程度らしいのだ。
俺はモンスターの住みかの移動を不審に思いながらも村に戻ってきた。
村から例の森は歩いて数分でつく。
道は一本道だが、森の木が多く、村をみることはできない。
村についた瞬間、異変を感じた。
音はないが、悲鳴を空間に落としたような――空気が張りつめていた。
二人は機敏に察して、俺よりも先に走りだす。
遅れて二人を追って向かうと……。

「ベアッ！？」

道中で襲ってきたベアよりも一回りいや、二回りほど大きい。
村がモンスターに襲われている。
村がここにあるということはモンスターの危険がもっとも少ない場所だからだ。
それでもたまには襲撃にあうかもしれないが、村人たちで対処できるはず。
モンスターの住みかが変わっていることは決定的らしい。
まだ、死人こそでていないが村人は必死に戦ったあとが残っていた。
こんなところで、声が出ない被害があったな。
悲鳴をあげたくても声が出ない。

悲鳴があがれば聞こえて助けにこれるのに、それがないから俺たちは気づくことがなかったのだ。

「村人は全員下がっていろっ！」

マナが怒号を上げて、村人を下がらせる。

クーテは既に魔法の詠唱に入り、村人を守るために一生懸命戦ったウーも俺たちに参加する。

ウルフなのに、ベアにいくらか傷を負わせているあたりを窺うにこいつはただのウルフではないのだろう。

「ウルフとゴウの二人は接近戦を頼む」

俺はいいとしてウルフは人間に数えられるのか疑問はあったが関係ないので深くは考えない。

「分かった」

返事をして弾かれたばねのように跳び、一番に攻撃を打ち込む。

スピードが乗ったいい一撃だと自負していたが、ベアは一歩退くだけですぐに反撃を加えてくる。

中まで攻撃が届いていないのか？

それより、ベアを殴った瞬間に壁のようなものがあったように思う。

そのせいで衝撃が半分くらい吸い取られたようだ。

あっさりと耐えやがったベアを見すえて、二撃目を放とうとすると、

「ガルッ！」

ウーが緑色の魔方陣――風属性魔法だろう――を出しながらベアに体当たりする。
ウーの周りには風の鎧のようなものが纏われている。
風の突進はベアには効果抜群のようで、俺の拳の一撃よりもあきらかにダメージを与えていた。
接近戦でも魔法があるようだな。
ベアは怒りからか、闇雲に殴ってくる。
足場に赤い魔方陣を浮かばせながら。
敵まで魔法使えるのか。

「グオウッ！！」

ベアは俺の見切れる速度を超えた連打を発動させる。
避けきれず、ガードで受けたが一撃で吹き飛ぶ。
体が地面に埋まりそうな攻撃だったが、俺の体には大したダメージはない。
元の体なら今のでお陀仏だったな。
そう思うと背中を冷たい汗が流れる。
いつ死ぬか分からない、緊張感。
不思議と俺には心地が良かった。
ここが俺の居場所のように感じられる。
バトルって面白いな。

「……ブラストボール！」

マナが叫んで風のボールのような球体が勢いよくベアに投げる。
ベアは何とか避けようとしたが、球体自体が対象を吸い込む力があるのか、吸いつかれるように逃げ切れないベアの腕を刈り取る。

「……クレイジーウインド！」

クーテが叫んだ魔法も風のようだ。
ベアを飲み込み、視認できる風のムチが左にいったり右に行ったりと奇妙な動きをしてベアの毛皮を毟っていく。
肌が見えたところに、

「ガルルッ！」

ウーが「止めだっ！」と叫んだように聞こえた。
ウーが鋭い犬歯でベアの首に噛み付く。
そこは厚い毛皮がなくなり、普通にかんだだけでもダメージを与えられる既に弱点と化した場所だ。
さらに風の魔法を牙に宿したのか鋭く切り刻みながら、首を喰らいベアは絶命した。
粒子になり、後には毛皮と爪が残っていた。
おおう、見事に活躍できなかった。
見事な連携プレイに割って入ることができず、俺は一体何をしていたんだと自責していた。
駄目じゃん。たぶん一番身体能力あるのに見てたよ。
後半完全に村人と同じだったよ。客観的だったよ。
俺、いらない子じゃん。
二人と一匹はイエイッとばかりにハイタッチしている（ウーは尻尾でマナとクーテにタッチしている）。
お、俺は混ざれねーぞ。
というか二人と一匹は俺のこと視界に入っているの？
ウーは俺の方を見て、歩いてくる。
二人はまだ、気づいていない。
く、来るな。俺の惨めな姿をそんなに焼き尽くしたいのか。
ウーは俺の願いとは裏腹に近づいてきてすっと座る。命令してもいないのに綺麗なお座りはどこかの金持ちの家の犬のようだ。

ウーは前右足をあげて俺の肩に置き、「ガウ……」と唸る。
まるで、「どんまい」と言っているようで、俺の心にマナとクーテの風の魔法に負けないくらいの暴風が吹き荒れた。

24　俺の推理

「なるほど……」

俺は村のみんなに聞き込みをしている。
マナとクーテは怪我した人の手当だ。
死人はでていないのは不幸中の幸いだった。
二人とも回復魔法が使えるので、そちらに専念してもらうことにする。
特に仕事がない人々のもとへ行く。
何人かに繰り返して聞いた結果、つい最近からモンスターの縄張りが変わりつつあることが分かった。
岩山のほうに生息するモンスター――フーリッシュドラゴンやベア――が村の近くに見られるようになっているのだ。
確かにここに来る時にも襲われたしな。
俺はフーリッシュドラゴンを思い出す。
少し、気になったことがあったんだ。
やせほそった体だった。
何日も何も食べていない所に俺たちと遭遇して、生きるために戦いを挑んできたんだろう。
餌がないのだ。
考えうる可能性は岩山に餌がなくなった。ベアも、腹を透かしていたのだろう。
餌を求めて生き物がいるほうに進んだ結果村が襲われてしまった。
ただ、今まで普通に暮らしていけたのに急に餌がなくなるということはありえない。
何か、原因があるはずだ。
原因を考えていると俺の頭の中には現在探している騎士が出てきた。

騎士が、岩山に住み着き餌をとって生活しているとしたら、すべてがつながるのではないか。
または、岩山で何かをするためにモンスターたちの縄張りを奪ったなども考えられる。
ドラゴンやベアが住んでいた岩山を探せば何かわかるかもしれない。
行き詰っていたが一応やることが見えてきたな。

「ゴウどうした？」

マナが治療を終えたようだ。
俺が僅かに笑っていたのを見て声をかけてきたようだ。

「いや、少し前進したかもしれないんだよ」

「どういうことですか！？」

クーテがマナの後ろからひょこっと飛び出てきた。
い、いたのか。マナの身長に完全に姿が隠れていた。
それにしても仲がいいな。
本当の姉妹のような絵になる二人。
さっきの戦いでより仲がよくなったようだ。
……俺は悲しいよぅ。
ここはさっき考えた推理を披露してクーテに凄いって言ってもらうしかない！

「今までに戦ったモンスターって全部岩山で過ごしてたんだろ？」

まず、これを伝えなければ話が始まらない。

「そうだな」「そうですね」

二人は納得していたので、補足で説明することなく進む。

「だから、何でいま岩山じゃなくてこんな所にいるのかって考えたら、騎士が岩山で何かしてんのかなと思ったんだよ」

たぶん、モンスターの縄張り移動がもっと早くに行われていればすぐに気づけたはずだ。

俺が考えるまでもなく、時間の問題だったな。

「確かに、考えると不自然ではあるな。いきなり縄張りが変わるとしたら空を飛んで住む場所を移動するドラゴンが現れるか、人間の手によって追い出されるかのどちらかが基本だ」

ドラゴンについては知らないがだいたいあっているようだ。

てか、フーリッシュドラゴンがいたせいでドラゴンがあまり強いという印象がないぞ、今の俺には。

「そっ、分かったかクーテ？」

クーテは、うんと愛玩動物のように可愛く首を上下する。

ああ、癒されるなぁ。

なんだか、多少尊敬の念がこもった眼差しに見えるのは俺の妄想ではないと思いたいな。

「じゃあ、明日岩山に行ってみますか？」

クーテは俺の考察を聞いたからこういってくるのはわかっていた。

彼女の瞳には多少黒いものがあるように思えた。

やっぱ家族の仇かぁ。

「そうだな……」

俺はクーテに同意の気持ちを示すが内心あまり行きたいとは思っていない。

もし、騎士と戦いになったとき、俺は動けるのだろうか。

騎士は、村人の話を聞く限りかなり横暴な性格の持ち主のようだ。

俺たちが、村が困っているのでやめてくれと頼んでもただで済むとは思えない。

戦いになるか可能性が高い。

殺さなければいい、とは思うが……殺さないように手加減して勝てるほど甘くはないと思う。

一応騎士などという職についているのだから。

どうすればいいんだろうな。

いざ、戦闘になり凍ったように動くことができなければマナとクーテを危険な目にあわせてしまう。

だから、たとえ戦闘になって相手を殺さなければいけなくなったとしても、二人を守ると思ってやろう。

それに、多少頭にきているのもある。

クーテという身近な人間の家族が殺されていることが俺に怒りを覚えさせるには十分だった。

この、怒りをうまく使えば殺すこともできるかもしれない。

俺たちは村長の家に戻り、村長に俺の推理を説明して、飯を食べてそれぞれの部屋に分かれて俺は布団に入ったが、その日は中々眠ることが出来なかった。

色々理由をつけても、まだ決心はつかない。

寝てしまえば早くに次の日が来てしまうから、俺はうだうだしていたんだろうな。

25　接近戦

「接近戦の魔法みたいなのを教えてくれ」

岩山を目指して歩いている道中で、俺はマナに頼んだ。

昨日の計画通り、

マナは「そういえば何も話していなかったな」と腕を組む。

少し悩んだ素振りを見せた後、マナの目が前方をおさめる。

つられてみてみる。バルーンラビットとウルフがいるようだ。

「なら、あそこにいるウルフで試そうか」

マナは少し先でバルーンラビットを襲おうとしているウルフに向かって歩いていく。

ラビットは気づいていないのか可愛らしく歩いている。

クーテと同種の癒しをもった可愛さだ。

「ゴウさんは戦いかた知らないんですか？」

「あー、全然知らないな」

「ガウッ！」

ウーが馬鹿にしたように吼える。

俺はこめかみに何かが浮き出てくるのを抑えながらマナを見る。

「接近戦では魔法を単体で撃つのはやめたほうがいい」

「単体で？」

「言い方が難しいが、ようは魔法だけではなく何か武器に宿したりしたほうがいいというわけだ。私なら剣。ゴウなら拳、足だな」

「なるほど」

「後は普通の魔法と大して変わらない。ただし、防御魔法などもあるのでそれも教えておく。防御魔法は簡単だ。魔法攻撃をガードしたいのなら自分の体の表面を魔力で覆うように発動させる。接近戦なら魔力を壁のように目の前に出現させるイメージを持つ。まあ、気休め程度の防御力なので、どうしてもというとき以外は使わないことを勧める」

俺は言われたとおり体表面を毛穴から魔力を吐き出すようにして覆う。

ほのかに光のようなものが体を覆っているのが視認できる。

次に魔力を外に吐き出したものを前方に出して、壁を意識して張る。

結構大変だ。目を瞑っていないとイメージがしにくい。

一生懸命に作ったものをマナに自慢しないばかりに　見せると、ゆっくり歩いてきて

拳で割りやがっや。

「所詮この程度で壊れる。それじゃあ、魔法を見せてやろう」

いつのまにか、二体のモンスターが争っている場所にやって来てバルーンラビットは今にも死にそうな状態で生かされている。それを上手に殺さないように捕食しているウルフ。

ああやると、魔力にならず腹を満たせるようだな。

残酷な姿だが、二人は見慣れているのか驚くようなことはない。

男である俺がびびるわけにもいかないので、毅然とする。
マナは見ていろと視線で訴えかけてきて、走り出す。

「氷雪斬！」

マナが叫ぶと、足場に水色の魔方陣が現れる。
剣をウルフに突き刺すとウルフは一瞬怯んだが、死ぬようなダメージではない。
反撃とばかりに牙をマナに向ける。
だが、追い討ちに氷がウルフを覆っていき体が凍り……砕け散る。
呆気なく終わった。
今のが接近戦での魔法なのだろう。
詠唱ありの魔法とは比べ物にならないほどに弱いが、接近戦ではかなり重宝しそうだ。

「ヒール」

マナは怪我したバルーンラビットを回復させる。
ちゃんと手当てするんだな。
マナの優しさを改めて感じながら、俺は自分で使う魔法名を考える。
さっき言っていたマナの魔法はどう考えても漢字だったな。
よしっ！　俺もかっこいい名前を考えてこの先バトルで活躍してやる。
活躍しておかないとクーテとマナに見放されそうだしな。
特にクーテには俺ができる男だということをアピールしないと。
熱の篭った目でクーテを見ると、クーテはいまいち俺の感情を理解していないのか首を傾げ「おなかすいたんですか？」と見当違いのを質問をする。
俺は戦闘が起きても魔法が使えるように何度も頭の中でイメージ

の練習をする。
魔法って大変だよな。
接近戦の魔法は詠唱なしだから、余計に難しく感じる。
実践することができないまま森に入る。
岩山までは森のような道を進んでいかなければならないが、道はあるし大した距離はなかった。
森を抜けると木によって遮られていた光が頭にかかる。
直射日光をあびると厚いな。
俺はそれでも顔をあげると、岩山というよりは何かの遺跡だったんじゃないかと表現したほうがいいような場所にでた。
ここが、たぶんそうなのだろう。
岩山は外から上っていくのではなく、中から頂上に行けるようだ。

「ガルルルルッ！」

ウーが突然唸る。
この声は何かに警戒したときのものだ。
俺が顔を向けると、岩山――遺跡の入り口に人がいることがわかる。
途端、ウーとマナの反応は早かった。
全く反応できずにマナに木陰へと引きずり込まれ、クーテはウーに突き飛ばされ俺たちがいないほうの木陰に身を隠す。
俺たちは物じゃないんだからもう少し丁寧に扱ってくれ。
騎士から隠れるためとはいえ、この扱いは酷い。
と、愚痴を胸奥でもらしていると。
俺は後頭部に感じる、なにやら柔らかい感触に意識が集中ししていた。
これは……胸！？
「胸がっっ……っ？」

「騒ぐなッ」

胸が当たっているので注意をしようとしたら、マナに口を押さえられる。

俺はどんどん熱が顔に集まっていく。

だ、だって、よくよく考えると、胸だけでなく太股なども俺に当たっていて、ぬおっ！

理性を抑えるのに手一杯だーっ！

マナは俺のことなど目を向けずに騎士の動向を窺っている。

「あれは、騎士か。それもファイトルの国の紋章をつけているな」

距離は結構あるのにすごいですねー。

俺は何とかで踏ん張りながらもさっきから頭をこすり付けるように僅かに振動させてしまう。

ほぼ、無意識のうちにマナの胸を俺が欲しているようだ。

とまれとまれと願うがうん、体は正直だ。

全然とまんねぇ。

「ん……あっ……や、やめろ。さっきからお前の頭が擦れてなんだか変な感じがするだろっ」

わずかに声につやを混ぜ、そんな事を言ってくる。

――どくん。

とマナの頬を染めた仕草に胸が脈打つ。

見られるのは大丈夫でもさすがにこういうのには耐えられないのか、聞いていて恥ずかしいじゃねーか。

マナは俺をようやく解放してくれる。

お、おそろしきかな大きな胸よ。

見た目ではクーテのほうが好きだが、やはり男を堕とすのは胸ということか。
ロリ巨乳がこの世界にいたら俺はたぶんそいつに屈服するな。
もう少し自制心を持とうと、固く決心して騎士がどこかに向かうのを確認してからクーテと合流する。

「何か話していたな」

マナがクーテに「はいっ」と声を昂ぶらせて言った。

「今のわたしの気持ちを言うなら、予想が確信に変わった。とでもいいますか。とにかくここが村の原因です。そして憎き、ぶち殺したい家族の復讐相手もいるところですっ！」

こらこら、後半笑顔で言っていいものじゃなかったぞ。
ウーは体をぶるりと震わせ、俺の方へやってくる。
なんだかんだでこいつに懐かれてるよな、俺。
ウーは毛をすべてぴんと針のように伸ばしている姿は人間の鳥肌がたつという行動に似ている。
俺も怖くて、鳥肌がたちそうだ。

「よし、その意気だっ！」

マナはなぜか激励してるし。
このパーティー女たちが怖い。
女は強いってのはどこの世界でも共通なんだな。
……ウーてメス？　オス？
できればオスでいてほしい。

26　頂上まで

俺たちは、今のうちに頂上を目指すことにした。
クーテが知っている情報では敵は四人だ。
そして、二人はどこかにでかけた（マナの予想では食事をとりにいった）。
敵は二人しかいない。
先に仕掛けて、尋問――事情をきいてやろう。
あと、クーテが暴走しないように見張らなきゃな。
山を登るために、洞窟のような入り口に入る。
中に入ると、構造はいたってシンプルだった。
螺旋階段のように頂上まで道が続いている。
ただ、それだけだった。
中にはモンスターの姿がないことから、ここから追い出されたのだろう。
これで、話の筋は通るな。
螺旋階段のような道は三人が並んでも歩ける程度には余裕があるので、仕方なく並んで歩いている。
というか……。

「あ、あまり早く歩くなっ」

「早いと、落ちちゃいますー！」

二人が、高所恐怖症に近い症状を見せている。
頂上にいって、もしも戦いになったらこの二人は大丈夫なのだろうか。
二人は怖い、怖いと俺の手をそれぞれ抱きつくように掴んでいる。
右は、ぺとっとした感触のクーテが、左はむにゅんとした天国に

昇る気持ちの感触が。
マナは左側なのだが、平気なんだな。
一応左側が螺旋階段の外側になっているので、一歩間違えば真っ先に落ちる場所だ。
混乱して気づいていないのか、理由はよく分からないが俺は幸せいっぱいなのでいいか。
螺旋階段の道は長くはない。
俺は二人の感触を味わいながらも、考えていた。
もしも、相手が話の分かるやつじゃなかったら。
戦って、殺すか、殺されるかの状況になったらと想像しただけで、頭が痛くなる。
どうすればいいのかな。
よっぽど悪いやつらなら殺せるかもしれない。

☆

頂上の光が差し込む。
出口付近まで来た俺たちは、そっと外から様子を窺う。
頂上は、丸いようだ。俺たちがいる場所はもっこり浮き出たようになった出口だ。
頂上の中心には二人の人がいて、片方は俺が日本でも時々みかける白衣を身にまとった人だ。
こちらの世界にも科学者のような人がいるのかもしれない。
二人はこちらに気づかずに、ずっと機械の前に立っている。
何か、機械を操作しているようだな。
機械は、大きくはない。
クーテが手で表現したほどの大きさだ。
……機械は、生きているかのように体を震わせている。

ポケットから機械の破片を取り出す。
俺のポケットに入っていた部品はよくみると紫がかっていて、男たちが操作している機械も全体的に紫がかっている。
というか、この部品なくても大丈夫なのか。

「あれで、間違いなさそうだな」

「そうか」

マナもクーテも冷静に戻っている。
もしも戦う時にさっきの様子じゃ勝てるものも勝てないからな。

「仕掛けるとしたら、今だな」

「殺すなよ。武器を取り上げて事情を聞くんだ」

主にクーテに向けて言う。
こいつは親の敵だからって暴れてしまいそうだからな。
彼女はしぶしぶと呟く。
こ、こいつは怖いよ。

「はい。分かってます」

俺たちは、簡単に作戦をたててから行動に移るために飛び出した。

27　決意

制圧は、あっさりだった。
科学者のような人間はそもそも戦闘をできないほどに弱い。
残った騎士はきらきらとした飾りのような剣を持っていた。
剣の腕はからっきしでマナにあっさりとやられていた。

「ここで、何やってたんだ？」

俺は機械を見ながら、科学者を問い詰める。
白衣にフードのようなものがついている。普通の白衣とは違う、ローブみたいなものだ。
フードを被っているせいで顔や髪は見えない。
ただ、男だとは分かる。

「お、俺たちはある実験で。頼む、早くしないと……死ぬっ」

縛られた白衣の男は切羽詰ったように叫ぶ。
満足に動くことの出来ない体をにょきにょきと毛虫のように動かしてぶつかってこようとする。

「死ぬ？　どういうことだ？」

「こ、ここにはそろそろドラゴンが来るんだよっ！　ロイヤルドラゴンがっ！」

「ロ、ロイヤルドラゴンだと！？」

白衣の男が叫んだ言葉にマナが反応する。

日本語訳で王族龍？　意味わからんぞ。

「マナ、そいつはなんなんだ？」

「知らないんですか！？」

もう、あっちこっちで喋るのはやめてくれ。

クーテがこの人常識ないんですかといわんばかりの視線で見てくるのは結構心へのダメージがでかいからやめてもらいたい。

「クーテ、どういうやつか教えてくれ」

クーテは指を一つ立ててちょっと胸を張って説明を始める。

「この世で気をつけなければいけないドラゴン第一位ですよっ。ドラゴンの中の王のような存在です。卵を産むのに岩山を好み世界中を飛び回っているドラゴン。産卵期に気性がとても荒くなり、少なくとも国の騎士が束でかかっても勝てるかわかりません」

「ゲェッ」

なんだ、そのラスボス級のモンスターは。

ゲームで言う、二週目とかにならないと勝てないようなモンスターじゃないか。

確かに、さっさととんずらするに限るな。

「そいつは、今こちらに向かってると連絡が来てるんだ。この実験を早く終わらせて、国に戻らないと」

どうやって調べたのかとかはとりあえず置いておく。

肝心なのは村の原因追求だからな。

「実験は何をやっていたんだ」

俺は胸倉を掴んでさっさと白状させようと激しく振る。

ドラゴンの存在を知ってしまったのでさっさとずらかりたいからな。

「広範囲での魔法発動を機械によりサポートする。この機械を使い、状態異常の魔法を広範囲で発動させる」

戦闘か何かに使う予定なのだろう。確かに声が出せなければ魔法が使えないとマナが言っていたのでそんなことになったら危険だ。

「つまり、お前等が村で起きていた事件の犯人ってわけだな」

「ああ、実験は成功だと思ってたが、それは間違っていた。魔力がほとんどないような相手にしか通じず、実戦での運用は不可能だと国に報告したら、国は運用可能になるまで戻ってくるなと通告してきたんだっ！　だから早くしないといけないんだっ！　離せ！」

「だとよ、マナ。俺はどう裁けばいいのかわからない。お前に任せる」

「分かった」

「ちょっと、まってください」

マナと入れ替わろうとした瞬間に、クーテが低く黒い声をあげる。

あの、クーテさん？　まさか本当に復讐しようとしてるんじゃな

いですよね？
いくら殺されたからって逆に殺し返してたら負の連鎖が続くだけだぞ。
「そちらの、騎士には見覚えがあります。わたしの両親を殺した人です」
「はぁ？　んなのしらねぇーよ。第一騎士は偉いんだから殺されたって文句言うなよ」
捕まっているにも関わらず、騎士は傲岸不遜な態度を貫いている。
やばい、初めて人間に対してここまでの殺意が湧いたかもしれない。
人を殺した癖に、クーテの大切な家族を殺したくせになんだその態度は。
この子がどれだけ苦しんでいたか、知らないからって物言いが酷い。
この世界の騎士の役割は知らないが、人々を守るためなのじゃないか？
人を守る存在が、こんなのでいいのか？
マナが剣を握る手に力を込めたのを制止する。
俺のほうをとめるなと睨んでくるが、それでもマナの動きは止める。
マナは声を張り上げる。
「騎士は、人を守るためにいるのに、なんだその態度は！」
「守ってやってんだから、文句言うなよ。それにな俺は国に戻ればそこそこの家系――貴族の人間なんだよ。いいのか殺して？　お前等犯罪者になるぞ」

ひゃっひゃっひゃと下卑た笑いをあげる。
……今まで、悩んでいたのが馬鹿みたいに心を闇が支配していく。
なんだ、地球がぬるまゆすぎたんだ。
殺したって、何も問題なんかなかった。もしかしたら異世界に来たことで俺のなかでの正しいもの――常識が揺らいでいるのかもしれない。
でも、それでいいのかもしれない。
殺されたっていい人間は世の中にはたくさんいる。
目の前のこいつがそうだ。放っておけばクーテか、マナが殺すだろう。クーテとマナの手を汚すことになるかもしれないのなら俺が……こいつを殺す。
決心したらすぐに体は動いた。
体を縛り付けていた人の死を俺は意識しなくなっていた。
何もない、感じるのは異世界がこんなにも悲しい場所だったのだという気持ちだった。
美少女たちと一緒にいたいなどという気持ちでここに来たが、全然違った。

「クーテ、お前は自分の手を汚すな。こんな馬鹿を殺してお前の未来に一生付きまとうのは駄目だ」

俺が、やる。

「ゴーさん？」

死ななきゃわからない奴もいる、か。
俺はどこかで聞いたその言葉を、頭で反芻しながら騎士の前に立つ。
覚悟を。人を殺すという覚悟を――決めた。

「んだてめぇ？　生意気にこっち見てんなよ」

自分の権威なら、どうにでもなると思っているのか、さらに偉そうにふんぞり返っている。

確かにこいつのいる国でなら効果はあるかもしれない。

だが、俺にはどうでもよかった。

そもそも異世界の人間だ。

人の死に敏感だったが、あっちではあっちの常識がこっちにはこっちの常識がある。

俺の体の中にある魔力は暴れたくてうずうずしているかのように脈打っている。

「これが俺の選択だ」

まずは、思いっきり怒りをぶつけるために顔面を殴った。

たぶんそれだけでも骨がいくつか折れたはずだ。

顔の骨は折れればどこもかなりのダメージになるはずだ。

騎士はほとんどしゃべることができなくなった姿で、それでも目では「俺は貴族だ」と訴えている。

不思議だった。あのときと違って人を殺すことへの迷いがない。

女の子を守るという自分に酔っているだけなのかもしれないが、今はそれでいいと思った。

「ここから、突き落とされて死ぬか。それともここに来るドラゴンの餌になるか、どっちがいい？」

「や、やめ……て、く……れ」

「お前は、クーテが『やめて』って言ったときやめたのか？　彼女

の懇願をお前はどうした？　自分は散々人を傷つけて自分だけ助かろうなんて虫がよすぎるぞ」

俺は騎士の男を頂上から蹴り落とそうとしたとき、圧倒的な爆風が俺を吹き飛ばした。

騎士の仲間か？　いや、違う。これは人間のだせるもんじゃないな。

俺は吹き飛ばした原因をある程度予想しながらため息を漏らした。

28　ロイヤルドラゴン

「ロ、ロイヤルドラ、ゴン」

科学者が、口を震わせてあきらめきった絶望の声をあげた。
だいたい予想はできていたので驚きはなかった。
それにしても、なんてタイミングだ。
まったく、このドラゴンは空気の読めるやつだな。
俺はその科学者からそちらに顔を移して、すぐに逃げるという選択肢が頭に浮かんだ。

「ゴウ！　そんなやつは放っておけ、逃げるぞ！！」

マナが、珍しく焦りをふんだんに含んだ声をあげる。
言われなくてもわかっている。
相対するドラゴン。
口からは煙のようなものが見えている。今は空中にいるが二足歩行もできるのか、太い足に人を殺すには十分すぎる太い腕。
藍色の鱗は太陽の光を反射させて、人間が作る芸術品なんてちっぽけに見えるほどに美しい。
あの鱗を使った食器なんてあったらうん億円するだろう。
背丈は、今まで一番でかかったベアの倍近くある。正直この頂上に住めるのか心配になるほどだ。
俺は現実逃避していたのかもしれない。
ただそこにいるだけで俺の体は氷結してしまうほどの威圧感。
俺は氷ついた体を暖めるために体を震わせる。
とてもじゃないが……勝てない。
一撃入れられればいいほうだろう。
倒すにはそれこそ最強の武器にレベルマックスで挑んでも勝利が

危ぶまれるような強大無比のドラゴン。

「ゴーさん！　はやくっ！」

マナが科学者の縄を解く。

俺はその時間を稼ぐために、怖かったがドラゴンの気を引くためにシャドーボクシングをする。

それが効果を出したのか、ドラゴンは俺の方に「ボゥゥ」と唸る。

声量だけで衝撃波が生まれる。俺は吹き飛びそうだったが何とか堪える。

マナが走り出したので俺も逃げようとしたら先程殴ったときに取れたのか、マナが言っていた国の紋章が落ちているのが視界に入る。

騎士の男のものだろう――拾ってポケットにしまう。

これを持ってこの国の王にでも文句を言いにいこう。

面会できるか知らないが。

「ボルアアアアアアー！」

ドラゴンが俺を吸い込まんばかりに肺に空気をためたかと思うと、世界を切り裂くような声とともに人間など一瞬で灰になりそうな炎を吐き出す。

完全に吐き出される前に俺は背を向けて走り出す。

圧倒的な熱量が離れていても背中を殴り、俺は熱に足が溶かされそうな錯覚を感じながらも思いっきり走る。

逃げる気力すら溶かしそうな炎が背中を焦がしそうになった瞬間。

「「アクアシールド、ダブル！」」

マナとクーテの魔方陣が合体して今までにみたことのない奇妙な魔法陣になっていた。

二人で同時に息を合わせたような魔法の発動により、威力が数倍にも上がっていると感じた。
俺の背中を焼きかけていた熱風が遮断される。
それでも熱風を防いだのは五秒ほどで、でも五秒で俺は二人に合流して、

「逃げるぞっ！」

二人に呼びかけて、岩山の外まで全力で逃げていった。
追ってくる気配はない。
ちゃっかり一番最初に科学者が下山していた。

29　解決

ドラゴンは頂上の場所から動こうとはしなかった。
あそこが気に入ったから邪魔な俺たちを排除しようとしたのだろう。
おかげで逃げる事ができたが。

「か、体が、立っていられない」

マナがそういって転がると、みんなが後に続く。
岩山の外、岩山をダンジョンというならここはフィールド。
いつ、モンスターが襲ってくるか分からない状況で、俺、マナ、クーテと科学者一名は体を地面に預けて寝転がった。
ウーは、疲れているようだが周りを警戒しているのか俺たち人間のように突っぷすことはないようだ。
さすがもと野生のもの、気がしっかりしている。
俺は体力には余裕があったが、精神的な疲労がすごい。
背中をちりちりと焼いた炎。二人に助けてもらってなければ今頃ハイになっていたかもだ。
そういえばあの時の二人の魔法は普通と違ったよな。
二人が一緒に放った魔法の存在も気になったし、科学者に聞きたいこともあったがすべてを投げ出して休みたかった。
息が整うまでそうしていると、科学者が真っ先に逃げ出そうとする。
俺はそれを捕まえて、睨む。

「色々、聞きたいことがあるんだけど？」

にこっと微笑み、拷問に近い形で聞きだした。

まとめると、機械は、ファイトルという国で作っているらしい。
ファイトルとは、俺が今いるこの大陸と船で渡った先にある大きな大陸の二つがそうらしい。
やたらとファイトルがどうたら、ファイトルがと言う男を掴んだまま、俺はマナとクーテに視線を向ける。
さっき、人を殺そうとしたところを見られたが表面上は俺への対応は特に変わりはない。
裏では知らないが人殺しが日常的なのはわかっていたので問題はないと思う。
二人に嫌われてたら寂しいよな。
ほっと胸を撫で下ろす。自分で覚悟しておいて情けないとは思うけどな。
それにしても、俺があの選択をするとは思ってもいなかった。自分でも理解していなかったが正義感にあふれる男だったんだな
自分の意志で殺そうと思うと案外あっさりとできそうだったのが怖いが。

「村に戻るか？」

ここで、寝そべってばかりもいられない。
科学者については、俺たちがどうこうできる問題ではない。
科学者本人も国帰ることはできないといっているし、放っておいても問題はなさそうだ。
と、思っていたのだが、科学者が俺たちに謝る際に礼儀からか頭に深く被っていたローブを外したときに、俺は彼を呼びとめた。

「あ、あんた、日本人か？」

黒髪、黒目の男。俺が学校で見かけそうなほどに日本人のような顔つきだ。

マナも目を瞬かせてみている。
「ニホンジン？　それは、なんだ？」
反応を見るに違うようだ。
「じゃ、じゃあ、あんたの国は……どこの出身なんだよ」
それでも、日本人のような容姿は俺にとって衝撃的だったのでさらに追及する。
男は答えにくそうにそっぽを向いた後「誰にも言うなよ」と教えてくれた。
「シエンスだ。科学大国シエンス」
「シエンスだと！？」「シエンスですー！？」
二人が驚きをあげた。
俺はいまいち頭が追いつかないが、科学大国？
この世界には科学なんて言葉がつく国があるのか。
日本も似たような名前じゃなかったか？　科学なんたらみたいな。
「それじゃ、さようなら」
男は呆気なくさっていき、残された俺たちはしばらくぼぅーとしていた。
正確に言うならマナとクーテは許容量を超えた驚きに思考がついていけていないようだ。
「なんで驚いてんだよ？」

クーテに聞こえると色々疑わしくなりそうなので、マナの頬を叩きながら尋ねる。
マナの頬が気持ちいいと堪能していると目を覚ました。
叩かれたことは特に気にしていないようだ。

「シエンスは、何十年か前に鎖国状態に入ったんだ」

鎖国ってまた昔の日本みたいだな。

「シエンスの大陸の周りには結界がはってあり、中の様子は見えない。ロイヤルドラゴンでさその結界を破ることは出来ないといわれている」

あいつが無理って頑丈すぎるだろ。
マナとクーテだって決して弱いわけではないのにあっさり壊されたんだから。

「そういえば頂上でクーテと一緒に使った魔法はなんなんだ？　一緒に発動してたけど」

「あれは、二人で同時に同じ魔法を発動させて魔方陣をあわせることによりいつもより数倍の威力を発揮することができるんだ。咄嗟だったから無意識にできたが、本来はかなり難しくてな、双子とかそのぐらいじゃない仲がよくないとできない」

なのに、できたと。
うぬぼれだが無意識に二人が俺を助けたいという気持ちがあったからできたんじゃないだろうか。
ぐふふふ、顔の筋肉が緩んでしまいそうだ。

二人が俺の命を心配してくれていると前向きに考える。

「じゃあ、今度こそ帰るか」

シエンスという国に行ってみたいが、マナの言葉が本当ならそれはかなり難しいだろう。

あの男がどうやってやってきたのか聞けばわかりそうだが、さすがにそこまでは教えてくれそうにもなかった。

どこの出身か言うのも嫌そうにしてたからな。

ただ、いつかは行きたいなぁ。

まだ、放心状態のクーテもマナどうようにぺちぺちで起こす。

クーテは安心したら腰が抜けたのか、立てなくなっており、俺が背中におぶって帰った。

いい匂いだ。

そういえば風呂に入ってないな。村では男は週に一、二回程度しか風呂に入らないので俺もそれに倣っている。

村に帰ったらいれさせてもらえるように頼もう。

クーテのぷにぷにボディを、クーテに気づかれないようにさりげなく触ることに力を使っていたらあっという間に村についた。

30　ご褒美

村に戻ったら、騒乱といわんばかりにうるさい祭りが開かれていた。
昼間なのにご苦労さんだ。
二週間ぶりに声が戻ったんだから仕方ないといえば仕方ない。
村ではモンスターを驚かさんばかりの祭りが開かれていた。
モンスターは音とか聞いてどういう反応するんだろうね。驚いて逃げるのか、驚いて襲いに来るのか。
できれば前者でお願いしたい。
俺とマナとクーテは村のヒーローみたいな存在ですごい褒めそやされて恥ずかしかったな。
この世界にも酒があり、何歳からでも飲酒していいらしいが俺は未成年の飲酒が体によくないのは知っていたので遠慮させてもらった。
異世界の俺は普通に酒は飲めないだろう。
こっちでも所詮酒は酒だ。
マナはバカみたいに飲んでいたけど、大丈夫か？
クーテも結構飲めるのか口にしていたが、おいおい子供にまで飲ませるなよ。
異世界の子は体の作りが違うのかもしれないが心配になるな。

「ごーさんもののめやごらーですー！」

こういうのはからみ酒というのだろうか？
クーテが木のコップ片手にのめのめとうるさい。
俺は酒くさいロリから、離れるためにウーを囮に逃げ出した。
「ガウガウッ！」と助けを求めるウーの声を背中に浴びて、笑いながら逃げる。

騒がしいのは苦手だが、悪くはなかった。
人助けをしたからかもしれない。
どっちにしろ人と関わることの少ない俺がここまで成長したのだから旅とはよいものだと理解する。
旅とは少し違うかもしれないが。

「お前は飲まないのか？」

そういえば、マナは俺のことを君と呼ばなくなった。
なんでも仲のいい人にはお前、初対面の人などには君と使い分けているらしい。
どっちが親しいのか俺には判断はつかないけどな。
物凄い量のアルコールを摂取しているはずなのに、酔っ払うどころか顔を赤くすることさえしていない。
たぶん前世がアルコールなのだろうな。
またはその親戚だ。

「俺の国じゃ俺みたいな若い奴は酒を飲むと体に悪いんだ」

「ふーん、損な宿命だだ」

そういって一リットルはありそうな酒を思い切り煽る。
……見てるだけで酔っ払いそうだ。
ていうか後半喋り方がおかしくなかったか？

「明日にでもこの村はでるのか？」

「……ほぇ？　いまらんていったぁ？」

完全に喋り方が変わっていた。

……身の危険を感じた俺は、逃げ出したが足を何かに掴まれてこけた。
マナの方をみると、足場に緑の魔方陣が浮き上がっていた。
酒と聞いてお約束の展開を想像していたが、まさかマナまで。というかこんな状況で魔法を使えるなんてお前いい魔法使いだな。
俺はロイヤルドラゴンに襲われたとき並みの緊張が体中に現れ、汗が吹き出る。

「なえにげろんだぁ？」

「目が据わってて怖いからだ」

それに呂律も回ってないしな、
さっきまで大丈夫そうに見えたが最後のでリミットブレイクしたのか。
俺は、多少の実力行使もやむをえないと思いながら、足の拘束を振り払いファイティングポーズをとる。。

「う、うう。私を虐めないで……」

なんだ、こいつ急に泣き始めたぞ？　情緒不安定か。
酔ったやつは色々な反応を見せるときいたことがあるがこれもその一種か？
さすがに泣いたやつは放っておけないから、

「別に何もしないって。だから、泣き止んでくれって」

どうしようか、と俺がマナに近づきながら考える。
マナまであと一歩のところまできた瞬間、マナは急に泣きやみにやぁと黒い笑みを浮かべて――抱きついてきやがった！

覆いかぶさるようにぶっ倒れてくる。
酒臭い、くさっ！
鼻が明後日の方向にひん曲がるぞ。
「つーかまえーた？」
「ご、語尾が疑問系だな」
焦りながらもそれだけは返すことができた。
マナはじりじりと俺の顔まで自分の顔を持ってきて、ニコリ。
なんかデジャブだ。
安心できる場所を見つけたとばかりに、甘い、相手の思考を奪うような笑顔を見せる。
こんな笑顔を向けられて、よく、俺が、自我を保ってイラレルナ？
危なかった。正直、押し倒されたときに背中を石にぶつけてなかったらアウトだった。
痛みで恐怖などを吹き飛ばせるのは知っていたが色欲もなんとかなるんだな。
「お前のことが、好きだ、好きだ、好きだ、すきだーぁ」
甘えた声をあげて、何度もその言葉しか知らない子供のように言い続ける。
……これが、酔ってないときに言われていたら、俺は……やばかったな。
勢いで押し倒していたかもしれない。
「うふっ」
色っぽい声をあげると、ぺろり。

俺の口の周りを舐めてきた。

「こへで、おまえもさけーがのめらな」

これで、お前も酒が飲めたなって言ったのか？

お、おい。

これは、キッスじゃないのか？

ちょっと違うかもしれないが、何科っていったらキス科に属するよな。

ふぁ、ファーストキスは酒の味。

奪った相手は俺の事を友達程度にしか思ってない。

女の子に積極的にされた俺は、酔っ払いのように顔が真っ赤だろう。

怒りは出てこないし、むしろ嬉しいよな。たとえ酔っ払った勢いだとしても、美人だもんな、マナは。

恥ずかしくて、逃げ出したいが。

俺は、それでも吹き飛ばしたりはできなかった。

だって男だもん、少しでもこの胸の感触とか太股とか味わっていたい。

すりすりと太股を俺の太股につけてくる。それだけで、頭の中が真っ白になりそうだったが、マナの偽造じゃないのかと疑いたくなるような胸がさらに俺の行動を奪う。

背中の痛みがなければマナに襲いかかっていただろうな。

今度から、酒をマナとクーテに絶は対飲ませないからな。

俺は、何度も「好きだ」と言ってくるマナの頭を撫でる。

時々背中の痛みを思い出して理性を奮い立たせながら、マナが寝付くまでずっとそうしていた。

すぐに寝てくれて助かった。

明日、起きたときにマナの記憶がないことを願う。

31　ウーと二人で探索

次の日。
今日、村を出発する予定だったのだが、マナの体調がすこぶる悪く（俺との記憶はないようだった）村をでることができなかった。
クーテも同様に体調が悪く、俺はウーと共にフィールドを闊歩していた。
魔法の練習をしにだ。

「そういやお前昨日は大丈夫だったのか？」

モンスター相手に何話しているんだろうと思いながらも聞くと、ウーは「ガッ！」と責めるような声をあげる。
さりげなく足を踏まれている。
俺は悪い悪いとウーの頭をぽんぽん叩いてから村の人に頼まれた品を思い出しながら歩く。
確か、ウルフの毛皮二枚とバーンラビットの毛皮だっけ？
バーンラビットというのは炎を吐くうさぎらしい。決して強くはないようだが、珍しい生き物で見つけるのが困難らしい。
無理しなくていいから見かけたら倒してくれだそうだ。
なんかそういわれると倒したくなる。

「そういや、お前仲間とかやられてるの嫌じゃないの？」

ウルフとかを目の前で倒したことがあったがどう感じているんだろう。
ウーは「ハッ」と鼻で笑い首をふる。馬鹿にしているのがありありと見えた。

今さらそんなこと聞くなよとか言っているに違いない。
こいつ、むかつくほどにかしこいよな。
思わず殴りたくなったぜ。

「なら、いいけどさ。っと、ウルフのお出ましか」

三体ほどのウルフに囲まれる。
涎を垂らしているのは人間という餌がいるからだろう。

「ウーはちょっと見ててくれ、魔法の練習がしたいからさ」

おとなしくウーは俺の後ろで待機する。
結構、俺の言う事とか聞いてくれるけど、懐かれたと喜んでいいんだよな。
ひとまず、それは置いておいて、一体目のウルフに向かって走りながら、イメージする。
自分の腕に風を纏わせているイメージ。

「オラッ！」

技名は考えていなかったので掛け声をあげてなぐると。
俺の足場に緑色の魔方陣が浮かび、ふわっとそよ風のようなものが腕をなでてウルフを殴る。
魔法は発動したが、イメージが全然できていないからか威力が悲しい。
敵に集中しながら自分の魔法を維持するのは難しいようだ。
頭の中ではできていると思えるが、実際に現象として現すのはかなり厳しい。
殴るために集中して、周りの状況も考え、その中で魔法を作りだす。

油断していたら残りの二体が覆いかぶさるように走るのが見えた。
今度もさっきと同じ魔法を使おうとしたが、結局大したものは発動せずにウルフを狩り終えてしまった。

「むず……」

ウルフの毛皮をマナからかりたアイテムボックスにつめていく。
毛皮以外にもただの毛とか、牙などがある。
フィールドを右に左に歩いていき、ウルフを片っ端から狩る。
ウルフ以外にもいたが、全体的な比率ではウルフが多いかったように思う。
何度もやっていれば、風パンチ（仮）もそこそこのレベルにまであがった。
それでも実戦に取り込むにはまだまだ駄目だった。
戦いながらのイメージ維持も少し離れたが、まだ実戦に使えるほどではない。

「それにしても、バーンラビットとかいうのはいないな」

俺の漏らした愚痴にウーが、

「ガウガウッ！」

何度も叫んでいるがどうしたんだろう。
俺は首を傾げながら、前をみて事情がわかった。
気づけばこの前の岩山の付近にまで来ていたことに気づき慌てて足をとめる。
ロイヤルドラゴンは、一度決めた産卵場所から数ヶ月移動しなくなる。
基本、人を襲いにかかることはない――前は住みかから追い出そ

うとしたから襲われた――のだが住みかに近づくと挑発しているととられ暴れる可能性があるので近づかないようにしろと忠告されていたのだ。
そういえば、頂上にいたうざい騎士と俺たちが入る前にどっかにいった二名の騎士はどうなったんだろう。
うざ騎士はどうせ逃げられずに頂上で殺されただろうな。
俺は、あの時うざい騎士を殺そうとした。腐っている人間だと思ったからだ。
今も、その気持ちは変わっていない。
生き延びていて、目の前に現れたら即座に殺しているだろう。
やっぱり、多少常識がずれはじめてるな、俺。
まあ、俺はこのままでいこう。
罪なき人々を殺して、へらへら笑っているような人間は死んだほうがいい。
盗賊のときとは状況が違った。あの時は、悪い奴らだと、聞かされただけ。
だけど、今回は被害に会っている人がいたこと、俺をあのとき動かした要因の一つだろうな。

「ウー、帰るか」

バーンラビットは今度でいいだろう。
それよりも、腹がすいた。
腹が減っては戦はできぬ。もう、討伐はやめようか。

「ガゥー」

間延びした声はウーが疲れていることを表現したようだった。
帰りも襲ってきたモンスターを倒しながら、村へと戻っていった。

32　新たな町への一歩　（終）

活気が湧いた村には既に今日何人かの旅人が泊っている。
ロイヤルドラゴンが訪れた土地は裕福になるという言い伝えがあるらしく、その恩恵を受けようと旅人が来ていた。
俺は近くにいる人に別れを告げながら足を動かす。
マナも体調を取り戻して、歩けるようにはなっていた。

「ありがとう」

マナも見送りにきた村人に感謝を告げている。
俺も、感謝を伝えつつフィールドに繋がる道を歩いていく。
最後の、入り口近くで、クーテとウーと村長がいた。

「これ、少ないけど感謝の気持ちを込めてだ。受け取ってくれるかな？」

袋に入っているのは、きっと金か何かだろう。
俺はそれをもらうと、今度は村長の後ろにいた男の人が何かを持ってやってきた。

「君に、武器だ。村からのお礼の気持ちだ」

袋に入ったそれを受けとり中を確認する。
中には篭手が入っていた。
俺がそれをとり、つけると体のサイズに合うようにぴったりと腕に張り付いた。
勝手にくっついて少しびっくりしている。

「それはクーテが魔法をかけてくれて使うものの体にあうようになっているからね」

「そうなのか。これも、くれるのか？」

さすがにもらいすぎなような気がして聞いたのだが、男はいやいやと手を顔の前にふる。

「それは君たちが倒したベアの素材と、君が昨日集めた素材で作ったものだから実質君が自力で作ったようなものだよ。バーンラビットの素材もあれば炎攻撃もプラスできたが、まあ、それでも十分だと思うよ」

男の人は朗らかに顔を崩す。

いい人たちだな。異世界でのはじめての村がここでよかった。

もしも、あの山であったうざい騎士しかいないような場所だったら即刻日本に帰還していた。

俺は感謝で頭をさげてから、クーテという名前で思い出す。

「クーテがいないな」

俺の呟きに村長が「それが……」と切り出した。

「あの子、あなたたちと一緒に旅がしたいとうるさいんです」

「別にいいぞ」

むしろ大歓迎だ。

クーテが一緒にいれば風呂場を覗く機会もあるだろうしな。

「あなたならそういうと思っていましたが、あの子もまだ子供です。旅に行かせるつもりはありません。それにあの子は私の知り合いの大切な子なんですから」

「……まあ、そうだよな」

この人はあの子の親みたいなものなんだから心配になるのも当たり前だ。

だから、無理やり連れて行くとか、クーテの意見を尊重しろとか無責任なことはいえないんだ。

「あなたたちはこの後どこに向かうつもりなんですか？」

村長の問いかけに昨日マナと打ち合わせしていた内容を思い出す。

確か、俺が国に文句言いたいと提案したらマナも了承して、北に向かう事になった。

ここから北に向かい、港で船に乗りここから一つ上の大陸へ移動。

そのままさらに北に向かって大陸の中心にある、ファイトルを目指す。

ファイトルが今いるこの大陸と北の大陸の国らしい。

だから、正確にはファイトルというの正しくないが、他に首都に名前があるわけではないので、ファイトル城下町とかファイトル城とか言うらしい。

それを伝えると村長は頑張ってくださいと応援してくれた。

「マナ、行くぞ」

こっちに来てから俺が先導することが多くなっている気がする。

なんで他の世界から来た俺がこんなに主導権を握っているのか疑

問が堪えない。
マナは、呼んですぐに顔を向けて名残惜しそうに村を一目見てから横に並んだ。

「それじゃ、みなさんさようなら」

なんだか照れくさくて顔を向けないで村の出口に行く。
「気をつけろよー」「仲良くしろよ」「子供できたら村に来てね」とか色々言ってくる。
おい、こら後半なんか勘違いがなかったか。
ちらとマナを見る。マナは気にした様子はなく、ただちょっと泣きそうな雰囲気を保ったままだった。
こいつってマジで最初の冷淡な感じの印象がないよな。これが素なのは一緒に暮らすようになって知っていたが、もっとかっこいい系の人だと思っていたからなんだか裏切られた気分だ。
可愛いからいいけどな。
最後に、クーテに別れを言えなかったのは残念だったな。
だけど、またいつかこの村に来てクーテに会いに来よう。
俺は夢を一つ持って、足を踏み出したのだ。

32　新たな町への一歩　（終）（後書き）

以上です。最終話です。
今回、プロットをかくことの大切さがわかりました。プロットとかないと話がぐだぐだになりますね。この作品はプロットを書いていません。
細かい世界観も大雑把にまとめたものしかなくて矛盾が多々あったと思われます。
次書く作品はもっとちゃんとしたものを書きたいです。
今までありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8072v/

望んだ異世界でほんわか旅

2011年9月7日20時12分発行